

文部科学省指定事業

令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」

【地域魅力化型】

〈ソピアの旗プロジェクト〉

研究開発実施報告書（第2年次）



令和4年3月

高知県立大方高等学校



## I 巻頭言 「ソピアの旗プロジェクト」実施報告書の発刊にあたって

高知県立大方高等学校長 正木 敏政

令和2年度から、文部科学省が主催する「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、研究開発を行ってきました。令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、4月の休校から始まり、手探り状態でのスタートとなりましたが、計画の見直しやオンラインの活用により何とか終わることができました。その経験を生かして、令和3年度はより深化した内容に掘り下げ、未来を切り開くための必要な資質・能力を身に付けるとともに、地域への課題意識や貢献意識をもち、地域ならではの新しい価値を創造し、新たな時代を地域とともに歩んでいけるような人材の育成に努めてまいりました。

本年度の取組については、運営指導委員会やコンソーシアム委員会において、学校設定科目である「地域学」や「総合的な探究の時間」の取組状況を報告し、具体的な実施内容の深化であったり、その後の方向性に対する助言や協力の要請であったりと、委員の皆様とともに作り上げていくことができました。また、カリキュラム開発等専門家から、適宜、担当者からの課題に対してのアドバイスをいただき、ときには、担当者全員に対しての指導助言もいただきながら、生徒へのアプローチの仕方やファシリテーターとしてどのような対応をしたらよいかなど、具体的な示唆をいただき、各教科との関連も踏まえながら実践に取り組んできました。

生徒一人一人が、様々な角度から課題を見つけ、自分事として思考力を向上させ、実践する力を付けるとともに、課題解決に向けた多様な価値観をもったり、実現に向けて行動したりとすこしずつではあるが、着実に成長していると感じています。

本校は、南海トラフ巨大地震への対応という課題を有する黒潮町の現実を理解し、高校生に何ができるかを考えることを通して、地元への理解や魅力の発見、課題発見や解決に向き合わせています。学校行事としての防災デーの実施や地域の方との備蓄倉庫の確認、地域の津波避難タワーの清掃活動、高知県版高校生津波サミット、保・小・中・高校合同避難訓練など、地域ならではの活動を実施しています。そして、令和3年度「ぼうさい甲子園」では高校生部門の奨励賞を受賞しました。

小さな町ですが、町内唯一の県立学校として、地域が一体となって支援してくださっています。それに応えられる学校であり、地域とともに歩いていく学校として、郷土を思い、郷土の魅力を発信できる人材育成に努めていきたいと思っています。

最後になりますが、本研究に関して、多くの皆様方、地域の皆様方からの忌憚のないご意見・ご助言・ご指導をいただくことで、今後の教育活動のさらなる発展・充実を目指し、未来を担う生徒の育成に努めてまいります。

令和4年3月吉日

# 目 次

I	巻頭言	
II	令和3年度 研究開発の概要	1
1	地域との協働による高等学校教育改革推進事業研究開発の概要	1
2	研究開発の実施体制	3
3	「ソピアの旗プロジェクト」の全体イメージ	4
III	令和3年度 研究開発実施状況	5
1	ソピアの旗プロジェクトの推進体制	5
2	運営指導委員会とコンソーシアム委員会	5
(1)	運営指導委員会	5
(2)	コンソーシアム委員会	8
IV	令和3年度 研究開発完了報告書	13
V	探究活動の柱となる科目のカリキュラムと再構築に向けた取組	23
1	「地域学」における各学年の取組	23
(1)	「地域学入門」(1年生)の取組について	23
(2)	「地域学Ⅰ」(2年生)の取組について	26
(3)	「地域学Ⅱ」(3年生)の取組について	29
2	「総合的な探究の時間」における各学年の取組	32
(1)	「総合的な探究の時間」 1年生の取組について	32
(2)	「総合的な探究の時間」 2年生の取組について	40
(3)	「総合的な探究の時間」 3年生の取組について	49
3	アンケート結果と分析	56
(1)	高校魅力化評価システム	56
(2)	防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート	56
(3)	大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート	57
VI	次年度に向けて	58
	補足資料	59

## II 令和3年度 研究開発の概要

### 1 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	こうちけんりつおおがたこうとうがっこう					
令和2～最大3年間	①学校名	高知県立大方高等学校				②所在都道府県	高知県
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	1学年80名定員。教職員数27名 (令和3年4月7日現在)	
普通科	35	28	30		93		
⑥研究開発構想名	「地域密着型の未来の“地域の創り手”人材の育成（ソピアの旗）プロジェクト」						
⑦研究開発の概要	<p>本校はこれまで、総合的な探究の時間において「自律創造型地域課題解決学習」を柱として位置づけ、コミュニティ・スクールの強みを生かした取組を進めてきた。近年は学校設定科目である地域学において地域防災における課題解決に取り組んでいる。生徒たちは、地域に出て地域から学ぶことにより課題解決能力が身に付いており、探究力の向上や地域貢献等への意欲も向上している。</p> <p>今後は本事業をとおしてつきたい力を育成するとともに、直接・間接に関わらず郷土を愛し誇りをもった未来の「地域の創り手」となる人材の育成を目指す。そのため外部の専門家との連携をもとに、新学習指導要領で位置づけられている探究活動を推進し、効果的なカリキュラムの開発を行い、事業終了後も改善を進めながら効果的な取組を継続していく。</p>						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>学校設定科目における「地域学」で推進している町や地域と連携した「防災教育」と、「総合的な探究の時間」における「自律創造型地域課題解決学習」を本研究をとおして深化させ、「生徒の探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」の向上を図る。そのために、コンソーシアム等に町内の各分野の人材と町外の有識者を位置づけ、地域との連携・協働を含めたカリキュラム開発を行う。これらの取組をとおして、広い視野と高い志をもった人材を育成することに資するとともに、将来の地域課題の解決に力を発揮することができ、地域の新たな魅力を創造・発信できる人材の育成を目指す。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校が立地する黒潮町は、南海トラフ地震の際の想定において、最大津波高が34mになると推定されており、防災の推進は地域の存続において不可欠の課題である。また、高齢化と若年人口の減少の状況にあり町内への定着・労働人口の確保、町外からの支援人材を育成する必要がある。これらの課題に対して、将来黒潮町や周辺地域において居住し、地域を支える人材となる高校生の資質・能力の育成は大きな課題である。これまでも高校生の若い力と多様な角度からの発想にもとづき、解決策を提案していくことを進めてきたが、更なる効果を生み出すためには、コンソーシアムを核とした幅広い人材との連携のもとで、取組を深化させていく必要があると考える。</p> <p><b>ア 町内外の人材との出会いと交流の機会の創出による自己効力感や自己有用感の育成</b></p> <p>課題：高知県の西部地域という立地条件のため中央部から離れており、高等教育機関との関わりや県内外の取組への参加も限られているため、生徒の視野は狭いものになりがちである。また、本校に在籍する生徒の中には、自信のなさや存在意義を見出せない生徒もいる。そのため、キャリア意識やアイデンティティの確立が十分ではなく、内向的な傾向にある。</p> <p>仮説：学校外の人材を積極的に活用し生徒と出会わせることにより、外からの刺激を生徒に与えることで多様な価値観を持たせることができ、自身の価値を感じるこ</p>					

		<p>とができると考える。また、学校外の場で生徒が発表したり、交流したりする経験を重ねるポートフォリオにもとづく肯定的なフィードバックにより、自己有用感や自己効力感を育むことができる。</p> <p><b>イ 開校当初からのコミュニティ・スクールの強みを生かした、地域連携による生徒の地域理解と貢献への意欲の醸成</b></p> <p>課題：コミュニティ・スクールでありながら、多くの教育活動が学校だけで完結している感があり、地域の企業との連携も個々の事業所の課題解決で終わり、その後につながっていないという閉塞感が存在する。そのため、生徒が地域の将来像を描きにくく、町の未来を考えた発言や自身のキャリアイメージに関連づけた発言も聞かれないという状況である。</p> <p>仮説：地域との交流や各種発表の場に積極的に参加するなど、取組を地域内外に広げていくことをとおして、生徒が地域の将来イメージを持ち郷土愛を育むことができる。また、地域や外部人材と連携した取組をとおして、個々の資質・能力の伸長を図ることができ、直接・間接に関わらず、地域の活性化や新しい価値の創造などに貢献できる人材を育成することにつながるができる。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">⑧-2 具体的内容</p>		<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>学校設定科目である「地域学」の時間を核として、地域防災・減災をテーマとした高校と地域との連携を進め協働関係を構築する。併せて、1年次から3年次までを、系統的につなぎ取り組んだ内容は地域内外に発信する。また教育課程外の活動では、高知大学との連携により、地域理解をもとにした防災ツアー等を企画し、生徒がガイドを務めることで発信力やプレゼンテーション能力等の向上を図る。</p> <p>総合的な探究の時間における「自律創造型地域課題解決学習」をもとに、アントレプレナーシップの精神の育成を目指して、町内の起業家が事例である「ケーススタディ」を展開する。また、多様な視点や自己のアイデンティティの意識化、イノベティブ思考を育成するために「アイデアソン」に取り組み、3年間の学びをとおして、これからの社会を生きていくために必要と思われる力の育成に努める。</p> <p>「地域学」や総合的な探究の時間において、各教科・科目の中での横断的な学びによる展開や、地域資源の活用・ゲストティーチャーによる指導等、外部人材を効果的に活用して、生徒の学びの促進を図る。</p> <p>これらの取組を推進するために、校外学習としてインターンシップや他校交流、研究者らとの交流等を行う。また、黒潮町役場への訪問や事業所・小中学校との交流、地域の行事への参加等を行い、広く学びの促進に資する。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>外部人材として雇用する「カリキュラム開発等専門家」と密に連携し、校長をはじめとした校内組織においてカリキュラム開発を推進する。その際、事業統括主任（加配希望ポスト）と管理職や外部人材との連携、事業統括主任の研究の推進、校務分掌や教科横断的な取組の展開により、カリキュラム開発を推進する。</p> <p>作成したカリキュラムについては、取組をとおして振り返りシート、ポートフォリオ、ループリック等を活用し、生徒の成長を確認する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等                      特例となる教育課程                      必要なし</p>
<p>⑨その他特記事項</p>		<p>○平成23年 文部科学省「学校運営協議会」による地域連携の推進に関する表彰 受賞</p> <p>○平成31年 内閣府主催防災教育チャレンジプラン審査委員会「防災教育優秀賞」受賞</p> <p>○平成30年8月1・2日 平成30年度「第1回全国高等学校小規模校サミット」参加</p> <p>○令和元年7月30・31日 令和元年度「第2回全国高等学校小規模校サミット」参加</p> <p>○令和元年9月10・11日 「世界津波の日」高校生サミット2019 in 北海道 参加</p> <p>○令和2年度当初に、黒潮町と推進協定を結ぶ。</p>

## 2 研究開発の実施体制

### ア コンソーシアムの構成

機関名	機関の代表者氏名
高知県教育委員会	伊藤 博明（教育長）
高知大学次世代地域創造センター	川村 晶子（客員准教授）
合同会社 Noks Labo	山崎 直子（代表）
京都大学大学院矢守研究室	杉山 高志（研究員）
黒潮町観光ネットワーク	森田 俊彦（会長）
黒潮町産業推進室	濱口 無双（産業推進係主任）
黒潮町教育委員会	橋田 麻紀（教育次長）
黒潮町立佐賀中学校	宮崎 宏治（校長）
黒潮町立大方中学校	大塚 明人（校長）
高知県立大方高等学校	西村 優美（地域学校協働活動推進員）
高知県立大方高等学校PTA	松岡 亘幸（会長）
高知県立大方高等学校同窓会	村越 麗（同窓代表）
高知県立大方高等学校	正木 敏政（校長）

### イ カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員の体制

区分	氏名	所属
カリキュラム開発等専門家	杉山 高志	京都大学大学院矢守研究室 研究員
カリキュラム開発等専門家	川村 晶子	高知大学次世代地域創造センター客員准教授
地域協働学習実施支援員	松田 真紀	大方高校地域学校協働活動推進員
地域協働学習実施支援員	西村 優美	大方高校地域学校協働活動推進員

### ウ 運営指導委員会の体制

所属	役職	氏名
黒潮町教育委員会	教育長	畦地 和也
NPO 砂浜美術館	理事長	村上健太郎
京都大学 人と防災未来センター	教授 上級研究員	矢守 克也
高知大学地域協働学部	准教授	石筒 覚
地域・教育魅力化プラットフォーム		田中 理恵
高知県教育委員会	教育長	伊藤 博明

### 3 「ソピアの旗プロジェクト」の全体イメージ

本研究では、「地域に定住」・「一度は地域外に出るがまた地域に戻って」・「地域外に出て戻ってはこないが、外から応援」する人材の育成を目指し、目的を未来の「地域の創り手」人材の育成として、地域の課題である「防災教育の推進」による「犠牲者0」の実現、地域の「新たな価値の創造」に向けた探究活動を展開する。そして、探究活動をとらして郷土愛を育むとともに、「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」の育成を目標として展開する。

本研究における中核は学校設定科目である「地域学」と「総合的な探究の時間」（以下：総合的な探究の時間）である。

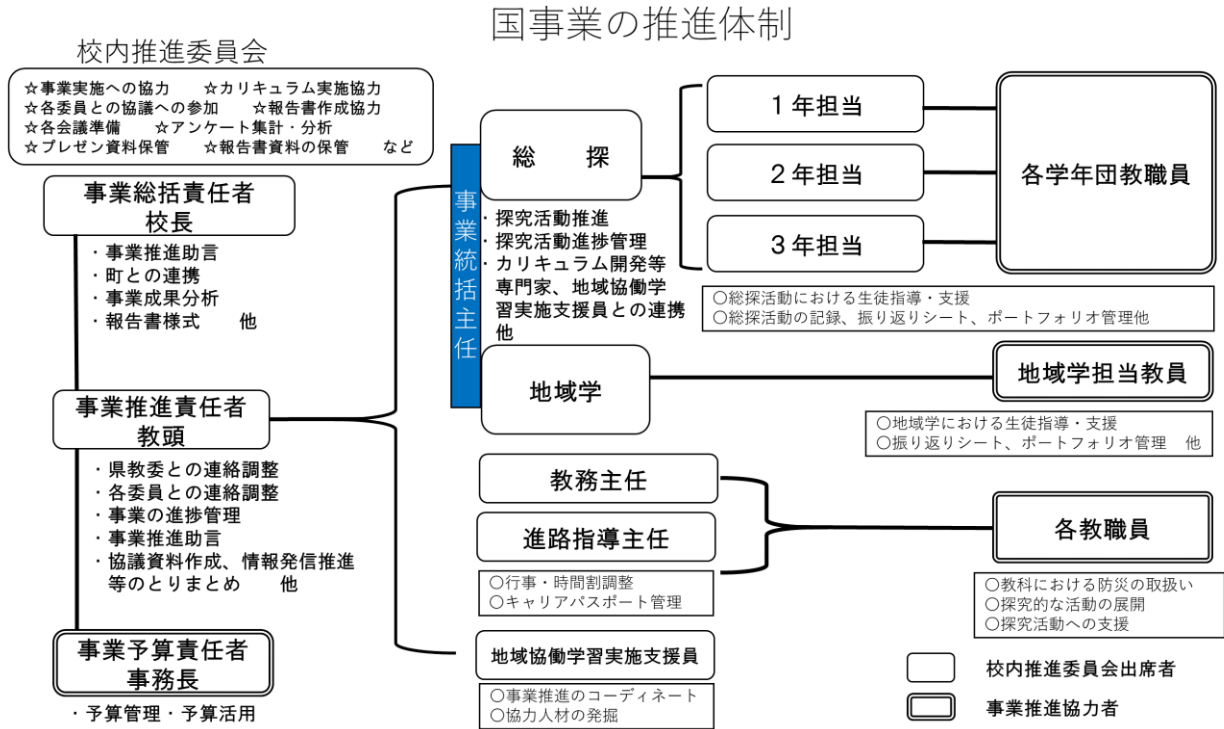




### Ⅲ 令和3年度 研究開発実施状況

#### 1 ソピアの旗プロジェクトの推進体制

本プロジェクトを推進するにあたり、「地域学」と「総合的な探究の時間」の担当教員を中心に、学校全体での取組となるよう、下記のような校内推進体制を整えた。



本年度はオンラインを活用し、カリキュラム開発等専門家との協議を密に行い、カリキュラムの開発と展開を行った。カリキュラム開発等専門家との協議のもと、事業統括主任、「地域学」主担当、「総合的な探究の時間」各学年担当による事業担当者会を基本的に週1回行い、カリキュラムの展開についての協議を行った。

また、事業担当者と事業推進責任者との協議も基本的に週1回開催し、カリキュラムの展開や進捗状況の確認、課題の共有・解決等の協議を行った。

校内推進委員会に関しては、地域協働学習実施支援員およびカリキュラム開発等専門家の同席が新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響もあり難しかったが、個別の協議等で共有し助言をいただいた。

#### 2 運営指導委員会とコンソーシアム委員会

##### (1) 運営指導委員会

運営指導委員会は下記のメンバーで構成し、年2回開催して協議を行った。

〈委員〉

石筒 覚 委員      田中理恵 委員      村上健太郎 委員      矢守克也 委員  
 畦地和也 委員

〈学校〉

正木敏政 校長      上原 健 教頭      田頭克文 主幹教諭

浦田友香 教諭      石丸滉貴 教諭      武市裕樹 教諭      北川紫陽 教諭  
北村清土 教諭      土居美都里 教諭      松田真紀 地域協働学習実施支援員  
西村優美 地域協働学習実施支援員

〈管理組織〉

野田健一 高等学校振興課長      市原則和 チーフ      中越啓介 指導主事

第1回運営指導委員会は以下の次第で令和3年6月21日に行った。

- 開会行事
- 会長・副会長選出
- 令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の実施計画についての説明および協議
- 閉会

前半は、県教育委員会から本事業の概要説明を行うとともに、学校側から本年度の計画や評価方法、ここまでの進捗状況等についての説明を行った。後半は、今後の取組に関して助言をいただいた。以下、各員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

- 地域と学校が連携するというプログラムの本当に大事なところを取り組んでいる。高等学校が行う地域連携のプロジェクトとして、単に学ぶというところから一歩も二歩も踏み出し、地域住民とともに命を守ることに向けて実践している。地域住民からもありがたいという声をたくさん聞く。地域の人を実際に動かすことにより、学ぶというこの手ごたえを生徒に感じとってもらおうという指導は素晴らしいと思う。
- 未来へのメモワールプロジェクトをどのような形ですすめていくか定まっていな中、「写真」で残すアイデアはとても素晴らしいと思う。

「総合的な探究の時間」に対して

- OODA ループ(※)は必ずしもOからスタートするわけではない。Dからスタートしても良い。行動から学ぶことも大切である。  
※OODA ループとは「観察(Observe)」「仮説構築(Orient)」「意思決定(Decide)」「実行(Act)」の4つからなる意思決定方法である。
- ルーブリック評価について、生徒が理解できるような言葉への言い換えが必要ではないか。ルーブリックの提示段階から言葉をかみ砕くのか、一般型を提示してその都度具体化していくのかは検討する必要がある。
- ルーブリック評価は活動の度に変わってくるので、一度3の評価となっても次に2や1にならないわけではない。繰り返しの指導が必要である。
- 情報収集の予測・憶測はとても大事である。「なぜそうなのか」をたどることが大事である。根拠が薄い方が大事である。生徒それぞれの主観的な考え方をくみ取ることが大事で、それを一緒に考えることにより教員と生徒との間での協働作業となり探究が深化する。教員も習っていない学問なので、生徒と教員もフラットな関係で、答えをもっていない問いに対してみんなで情報収集することが大切である。
- 買い物は物欲を満たすだけではない。便利な未来は素晴らしいことになるが、人間に

とって本当の幸せにつながっているかについてを探究のテーマとして取り組むと奥深い探究につながると思う。

- 3年生の取組は、役場の人にも関わってもらうべきである。課題が何かを意識できるという点ではかなり良い教材である。高校生の視点で役場へ提案ができるようになれば良く、そこに明確な根拠づけを求めるのではなく、簡単な理由付けがあれば良い。行政側の立場や考えを共有できる機会を途中で交えたほうが良い。

「ルーブリック評価」に対して

- 双葉未来学園のルーブリック評価は分かりやすい。
- ルーブリック評価が生きるのは、生徒が就活などで自己分析をしだすようになってからである。そのため、1・2年生の段階ではあまり効果が出てこないかもしれないが、3年生になって進路を考えるときの材料になってくると思う。

まとめ

- PDCA は目に見えるものに重きを置いてループを回すように思え、OODA は心情や願いなどの目に見えないものに重きを置いているように思える。どちらが良いというわけではなく、ケースによって使い分けることが大切ではと思う。これからは「教える」ではなく「導く」が大切になってくる。教員も一緒になって探究をするということが子生徒たちのやる気に火を付けることにつながると思う。
- それぞれの地域の特性・生徒の持ち味を生かした学習のスタイルがあると思う。OODA の思考や経験学習のポイントは実体験をもとにうまく生かせるので、継続していくと生徒の伸びが見えると思う。役場や大学も活用して探究活動を推進していただきたい。

第2回運営指導委員会は以下の次第で令和4年2月7日に行った。

- 開会行事
- 今年度の取組報告と次年度以降の取組についての報告と協議
- 閉会

第2回は、学校側から「地域学」と「総合的な探究の時間」について、それぞれ本年度の取組と次年度の取組の方向性についてまとめて説明した。その後協議を行い、今後の取組に関して助言をいただいた。以下、各員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

- 先日津波警報が出たとき、実際に生徒はどう動いたか。実際の災害が起きたときに授業での学びが行動に現れる。学びを授業だけで終わらせず、実際に行動できる生徒になってもらいたい。
- 振り返り場面の工夫をすることが大切。生徒同士がお互いの活動をフィードバックでき、学びの言語化ができれば良いと思う。
- 課題意識をもつ場面は一人一人違う。授業の中で解決策は見つけれなくて良い。どの場面においても、本人が課題を捉えることが大事である。

「総合的な探究の時間」に対して

- 振り返り＝ダメ出しの印象を持っている生徒がいることは、振り返りの本来の意図が伝わっていないことになる。振り返りを大事にされていることはとても良いことであるので、生徒に振り返りの意図をしっかりと伝えるべきである。自分自身で振り返りできるようになるのが理想である。
- 否定・肯定のことを考えると 2 年次の「－を＋に変える」につながりがあってよい。
- 中学校の学びやパーソナルは毎年異なる。高校入学時の 1 学期の様子を見て、フレキシブルな対応が必要。
- 当初の計画を柔軟に変えることが大切。
- 「(マイナス) × (マイナス) = (プラス) になる」
- 幸せ、働くこと、働き方、多様であり、人それぞれ異なる。話を聞く相手によって質問を変えるなど、上手に相手の意見を引き出せるようにならなければいけない。
- 前半にやったことが後半に結びくように、適度に振り返りをしていくと良い。アイデアを自由に出しやすい雰囲気づくりを大切にしたい。楽しさを伝える工夫が必要である。
- プレゼンをさせずに会話を繰り返すことで内容を深めるといった授業もある。授業の中で山場の作り方を意識することと、山場を越えた後の設定には工夫が必要である。
- 幸せの定義は非常に重要である。突き詰めることで一人一人の課題意識が出てくる。自分事になっていなければ、授業外の活動が生きてこない。授業内外の活動を楽しくさせるためには自分事として課題を捉える必要がある。
- 地元の事業者と関わった際、そのあとの報告をし、関係を密にすることが大事である。
- 探究では、実社会で役に立つ力を育てようとしている。教科で学んだことが実社会で生きるようにする工夫が必要である。

## (2) コンソーシアム委員会

コンソーシアム委員会は下記のメンバーで構成し、年 3 回開催して協議を行った。

### 〈委員〉

川村晶子 委員	山崎直子 委員	杉山高志 委員	森田俊彦 委員
濱口無双 委員	橋田麻紀 委員	宮崎宏治 委員	大塚明人 委員
西村優美 委員	松岡巨幸 委員	村越 麗 委員	正木敏政 委員

### 〈学校〉

上原 健 教頭	田頭克文 主幹教諭	浦田友香 教諭	石丸滉貴 教諭
武市裕樹 教諭	北川紫陽 教諭	北村清土 教諭	土居美都里 教諭
松田真紀 地域協働学習実施支援員			

### 〈管理組織〉

野田健一 高等学校振興課長	市原則和 チーフ	中越啓介 指導主事
---------------	----------	-----------

第 1 回コンソーシアム委員会は以下の次第で令和 3 年 7 月 20 日に行った。

- 開会行事
- 会長・副会長選出
- 令和 3 年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の実施計画についての

## 説明および協議

### ○ 閉会

第1回は、学校側から本年度の計画や評価方法、ここまでの進捗状況等についての説明を行った。また、第1回運営指導委員会における協議の内容を踏まえ、取組を充実させるために必要なことについて協議を行った。学校からは「PBLを行うにあたってのインプット材料」、「SDGsに関わる企業や人材」に関して、情報提供を求め、それぞれ、情報をもらい、その情報を活用した学びについても意見や助言をいただいた。以下、各員の発言の概要を示す。

#### 「地域学」に対して

- 生徒の興味、新聞の時事的な問題から課題を見つけて取り組んでいる。
- 未来のメモアールの取組に中学校も参加したい。
- 避難路の掃除等、生徒の自発的な取組を地域と結び付けることが良い。
- 避難訓練の内容や避難訓練に参加するまでの過程も生徒と行政と一緒に検討していくことも考えられる。
- 防災は人ありき。防災はことではなく、人ありきで進んでいくことが多いので、事柄の学習だけでなく、人にフォーカスをあてた活動を入れてみてはどうか。具体的にはOB・OG等に訪問をしていただいて、近いロールモデルを出しつつ考えるという点を強化してみても良い。より深い学習にするためにいかにして普段の学習から防災的要素を入れていくかが重要。

#### 「総合的な探究の時間」に対して

- 生徒から課題・意見が出てきて、それが政策に採用されていくと行政と連携して実施できるのではないかと。単発で終わらず、継続的に取り組むことが重要である。
- 「目指すべき姿」、「現状がどこなのか」このギャップが課題であり、ギャップを生徒たちが考えることが重要である。
- 人口減少について、観光だけでなく移住までが目標であり、その点について生徒たちと交換していきたい。
- ギャップを探りたいと生徒が言っていたが、移住者へのアンケートではそことリンクしている。生徒自身が気づいていたところが良い。それを全体の学びにつなげていけるようにしてほしい。
- 昨年度の発表と先日の発表とを見比べて、課題の再設定が必要だと生徒自身が気づいている。生徒の探究に対する取り組み方が変わる時期である。探究にハッと気づく機会にもなる。
- SDGs 学習について、土佐佐賀産直組合の作っている商品は持続可能なものも多い。やっていることが実は SDGs というのは多いのではないかと。例えば砂浜美術館も維持費0円なので持続可能な取組といえると思う。
- SDGs をどう教育するかが重要である。2030年の開発目標、何を達成するのか、達成目標を掲げて行うことが企業に課せられている。持続可能な開発目標なので、間違えないように生徒たち自身に調べさせる。社会にとっても、企業にとっても、社員にとっても持続できるやり方を探究すべきである。起業は投資もしながら回収もする。ボランティア活動とSDGsの考え方は違うことも理解させてほしい。

- PBL のインプット材料について、黒潮町の元々の伝統の仕事に密着すれば、子どもたちの知らないことを深めれるのではないか。にら農家、らっきょう農家、漁師等題材がある。外だけでなく、中にも視野を広げる必要がある。
- 教員のシナリオどおりの総合の美しい発表をする生徒は、本当に自分で考えたのかと思われる。このような発表をする生徒は離職率も高い。仕事の上でも、考え抜く、学び続けるという点で苦労していくのが探究学習と共通する点である。
- 総合的な探究の時間は、社会の実践としての時間である。私たちも子どもたちも変化をしなければいけない。
- ルーブリック評価は自分のパフォーマンスを評価するものであり、自らの成長を自覚する。社会は仕事の量ではなく質で給料をもらうような時代に変化し、自分でパフォーマンス評価をしていかないと、給料の交渉もできない。美しい発表はいらぬ。生徒の成長が感じられる探究の時間になってほしい。
- 役場の方、協力してくれている方に生徒の発表のダメなところはダメと言って欲しい。社会では通用しないとはっきりと伝えてほしい。

第2回コンソーシアム委員会は以下の次第で令和3年10月28日に行った。

- 開会行事
- 令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の実施計画についての説明および協議
- 閉会

前半は、学校よりここまでの取組・成果・課題についてと今後の取組についての説明を行い、委員の方よりそれに対しての意見や助言をいただいた。後半は、コンソーシアムと学校の連携についての協議を行った。以下、各員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

- 防災作文で行ったような生徒間での回し読みは、メモワールでもやれないか。
- 昨年と違って教員側の手応えを感じる。子どもにも変容が見られるのではないか。
- 大方高校が実践している防災教育のプログラムと役場が期待しているものにズレがあるように感じる。
- 中学生が防災学習をキャリアに結び付けて考えており、大方高校への入学を希望する生徒が増えてきている。継続した学習ができればと考えている。

「総合的な探究の時間」に対して

- ケーススタディを実施するにあたって、教員が構造化に臨み、生徒にプレゼンをするなど大方高校の教員の探究学習推進に対する意欲がすばらしい。
- 1年生は着実に力をつけている。
- 実際の仕事で活用できることを授業で実践してくれている。
- 生徒たちに学習の目的が理解されていないのではないか。
- データを分析し、課題をあらゆる角度で考えていく力をつけなければならない。
- フードロスについては、黒潮町も今後取り組んでいく課題であるので、連携できると

ころは連携していきたい。

- フードロスを考えるとき、システムだけではなくエモーショナルなところやリーダーシップの取り方についてなどを大切にしてほしい。

第3回コンソーシアム委員会は以下の次第で令和4年2月14日に行った。

- 開会行事
- 令和3年度の実施状況および令和4年度の計画についておよび協議
- 閉会

「地域学」、「総合的な探究の時間」の各学年について、令和3年度の取組・成果・課題についての説明と、次年度以降の取組についての説明を行い、意見や助言をいただいた。あわせて、コンソーシアムと学校の連携についての意見もいただいた。以下、各員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

- 逃げトレ訓練について、コロナの状況によって地域の人を巻き込んで実施できない場合は、条件を変えて複数回の逃げトレを生徒だけで行うのはどうか。あえて失敗するような体験をさせるのもいい経験になる。速度を落として歩いてみる。準備時間を増やすなどを取り入れてみると幅が広がる。
- 臨時情報からのシナリオがあらゆる立場で思考できていた。論理的思考力、想像力を働かすことができているのではないか。高校生たちがシナリオにアニメーションやBGMをつけてビデオを作成しているので、授業の中で活用していただきたい。
- 広場のCMは黒潮町のYOUTUBEや研究室での活用も検討してほしい。
- 同窓生として関わられるようなことを考えていた。卒業生からの話などできるのではないか、卒業生と在校生の橋渡し役ができればと思う。
- 被災者の方の斡旋をぜひやらせてください。
- 3年生の持続可能な避難所生活を考えるテーマは良い。ゼロカーボンというキーワードを加えて、(防災)×(ゼロカーボン)を考えていくといい視点で探究できると思う。
- 地域学の授業であるが公共の授業にも活用できるのではないか。

「総合的な探究の時間」に対して

- 先生方が授業に対して前向きに取り組んでいる。先生方の中に手ごたえを感じていると強く感じた。生徒たちにも波及している。相手がどういうことを考えているか、ロジカルに設計していく。客観的なデータを分かりやすく見せようとするところが授業内の時間で成長していた。
- インプットを丁寧にするほうがいいのではないか。子どもたちの思考の中で改善するとなるとダメ出しから入ってしまう可能性がある。プラスを見続けることに意識させては、マイナスをフルモデルチェンジしようとするとは全く違う方向に行ってしまう。マイナーチェンジでもいいのでは。「今できることは何だろうか」、「今ここはいいよね」、「足りていないものは何だろうか」という思考の仕方が必要。プラスを見続けることはどうということなのか、論理的に説明したうえでスタートしたほうがいいのではと思う。
- アイデアが個々に違って表現できていた。アイデアのなかに色々な幸せがあって興味深かった。アイデアの中に防災の視点が自然と入っているのが大方高校の生徒らしさを感じた。

- コンペティションに応募してみると良いのではないか。そこを目指して取り組んでいくのもおもしろいのではないか。
- 黒潮町役場は学校にも近いので、情報収集で役場を活用してもらえればと思う。フードロスについて、黒潮町役場に提案も頂けると関わりができていけるのではないか。
- きれいな形で発表しようとする大人が仕上げてしまうため「こんな風にしたらいい、情報収集⇒まとめ⇒討議⇒発表」と陥らないようにした先生方の姿勢が子どもたちに伝わっていることが大事である。
- この学習で何を学ぶのかを生徒自身が自覚することが重要である。大方高校はその芽が出てきたと感じている。
- 総合的な探究の時間の考え方だけを変えるのではなくて各教科全体的に変えるという行動が生まれてきた。
- 探究的に学習にすることとはどういうことなのか。もともになる部分、考え方を共有していく必要がある。学んできたことをシェアしていただき相互に成長していきたい。



### Ⅲ 令和3年度 研究開発完了報告書

令和4年3月31日

#### 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 高知県高知市丸ノ内1丁目7番52号  
管理機関名 高知県教育委員会  
代表者名 伊藤 博明

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

#### 記

##### 1 事業の実施期間

令和2年5月25日（契約締結日）～令和4年3月31日

##### 2 指定校名・類型

学校名 高知県立大方高等学校  
学校長名 正木 敏政  
類型 地域魅力化型

##### 3 研究開発名

「地域密着型の未来の“地域の創り手”人材の育成（ソピアの旗）プロジェクト」

##### 4 研究開発概要

本校はこれまで、総合的な探究の時間において「自律創造型地域課題解決学習」を柱として位置づけ、コミュニティ・スクールの強みを生かした取組を進めてきた。近年は学校設定科目である地域学において地域防災における課題解決に取り組んでいる。生徒たちは、地域に出て地域から学ぶことにより課題解決能力が身に付いており、探究力の向上や地域貢献等への意欲も向上している。

今後は本事業を通してつきたい力「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」を育成するとともに、直接・間接に関わらず郷土を愛し誇りをもった未来の「地域の創り手」となる人材の育成を目指す。そのため外部の専門家との連携を基に、新学習指導要領で位置づけられている探究活動を推進し、効果的なカリキュラムの開発を行い、事業終了後も改善を進めながら効果的な取組を継続していく。

##### 5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目  開設している      ・  開設していない
- ・教育課程の特例の活用  活用している      ・  活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
伊藤 博明	高知県教育委員会 教育長	管理機関の職員
畦地 和也	黒潮町教育委員会 教育長	関係行政機関の職員
村上 健太郎	NPO 砂浜美術館 理事長	学識経験者
矢守 克也	京都大学 教授 人と防災未来センター 上級研究員	学識経験者
石筒 覚	高知大学地域協働学部 准教授	学識経験者
田中 理恵	地域・教育魅力化プラットフォーム	学識経験者

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
高知県教育委員会	伊藤 博明 (教育長)
高知大学次世代地域創造センター	川村 晶子 (客員准教授)
合同会社 Noks Labo	山崎 直子 (代表)
京都大学大学院矢守研究室	杉山 高志 (研究員)
黒潮町観光ネットワーク	森田 俊彦 (会長)
黒潮町産業推進室	濱口 無双 (産業推進係主任)
黒潮町教育委員会	橋田 麻紀 (教育次長)
黒潮町立佐賀中学校	宮崎 宏治 (校長)
黒潮町立大方中学校	大塚 明人 (校長)
高知県立大方高等学校	西村 優美 (地域学校協働活動推進員)
高知県立大方高等学校 P T A	松岡 亘幸 (会長)
高知県立大方高等学校同窓会	村越 麗 (同窓代表)
高知県立大方高等学校	正木 敏政 (校長)

8 カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	杉山 高志	京都大学大学院矢守研究室・研究員	都度依頼し 謝金支払い
カリキュラム開発等専門家	川村 晶子	高知大学次世代地域創造センター・客員准教授	都度依頼し 謝金支払い
地域協働学習実施支援員	松田 真紀	大方高校地域学校協働活動推進員	都度依頼し 謝金支払い
地域協働学習実施支援員	西村 優美	大方高校地域学校協働活動推進員	都度依頼し 謝金支払い

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 ( 契約日 ~令和4年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
各種会議等における日程調整や情報提供	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
円滑な事業執行のための学校への助言	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
国費に上乗せした独自の支援や取組の実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
地域協働学習実施支援員の配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

(2) 実績の説明

①運営指導委員会について

活動日程	活動内容
令和3年6月21日	第1回運営指導委員会 ア 令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の取組についての説明。 イ アに対しての意見や助言をいただいた。 ウ 「OODAループの回し方やPDCAとのケースによっての使い分け等」、「ループリック評価」について協議が行われ、指導・助言をいただいた。
令和4年2月7日	第2回運営指導委員会 ア 令和3年度の取組・成果・課題についての説明と、次年度以降の取組についての説明。 イ アに対しての意見や助言をいただいた。振り返りの重要性や、探究活動が実社会で役に立つ力につながり学んだことが生きるように工夫すること等の指導・助言をいただいた。

②コンソーシアムについて

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和3年7月20日	第1回コンソーシアム委員会 ア 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の取組について、令和3年度第1回運営指導委員会でもいただいた指導・助言を生かした事業計画等の報告。 イ アに対しての意見や助言、協働できることの提案をいただいた。 ウ 学校から「PBLを行うにあたってのインプット材料」、「SDGsに関わる企業や人材」に関して、情報提供を求め、それぞれ、情報をもらい、その情報を活用した学びについても意見や助言をいただいた。
令和3年10月28日	第2回コンソーシアム委員会 ア ここまでの取組・成果・課題についての説明と、今後の取組についての説明。 イ アに対しての意見や助言をいただいた。 ウ コンソーシアムと学校の連携についての協議。
令和3年11月27日	日本赤十字社との連携 同窓生で日本赤十字に勤務しているコンソーシアム委員の仲介で高知県青少年赤十字高校生連合会総会に参加。参加した生徒と防災活動に関して交流を行った。
令和3年4月30日、7月1日、8月23日、8月6日、10月11日、1月13日、令和4年3月8日	ふるさとキャリア教育 黒潮町まるごと教育祭 教育祭の発表やコロナ禍での実施方法等についての協議を実施。保育所、小学校、中学校などの関係機関と6回の協議を重ねた。昨年に引き続き、コロナ禍により集合しての発表は難しく、黒潮町のケーブルテレビで配信した。
令和4年2月14日	第3回コンソーシアム委員会 ア 令和3年度の取組・成果・課題についての説明と、次年度以降の取組についての説明。 イ アに対しての意見や助言をいただいた。 ウ コンソーシアムと学校の連携についての協議

③カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けは以下のとおりである。

【総合的な探究の時間のカリキュラム開発担当】

高知大学 次世代地域創造センター客員准教授の川村晶子氏（都度謝金支払い）

・本年度は6回来校。オンラインでの協議18回。大学での協議2回。

【地域学のカリキュラム開発担当】

京都大学矢守研究室研究員の杉山高志氏（都度謝金支払い）

・本年度はコロナ禍により来校できず。オンラインでの協議17回。

### 活動実績【総合的な探究の時間】

活動日程	活動内容
令和3年5月14日	オンライン ・カリキュラムの内容について
令和3年5月28日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年6月1日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年6月8日	オンライン ・取組状況の共有と課題解決に向けた意見交換
令和3年6月29日	オンライン ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和3年7月5日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年7月13日	オンライン ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和3年8月3日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和3年8月24日	オンライン ・次年度の方向性と探究活動について協議
令和3年9月10日	オンライン ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和3年9月21日	対面 ・3年生発表会の講評等
令和3年9月29日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年10月8日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年10月14日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年10月27日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年11月12日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年12月3日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の共有と意見交換
令和3年12月7日	対面 ・3年生と対話による意見交換および助言
令和3年12月21日	対面 ・3年生のプレゼンテーションへの助言
令和3年12月22日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和4年1月4日	対面 ・進捗状況の共有と意見交換
令和4年1月11日	オンライン ・3年生発表会の講評等
令和4年1月14日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和4年1月21日	オンライン ・進捗状況の共有と意見交換
令和4年1月25日	対面 ・1年生ワールドカフェの評価等
令和4年2月15日	対面 ・2年生発表会の評価等

### 活動実績【地域学】

活動日程	活動内容
令和3年4月8日	オンライン ・地域学のカリキュラムの全体像について ・未来へのメモワールについて ・教科横断的防災学習について
令和3年4月16日	オンライン ・地域学のカリキュラムの全体像について ・未来へのメモワールについて
令和3年6月10日	オンライン ・防災委員会の取組について ・活動を効果的に進めるための意見交換
令和3年6月15日	オンライン ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和3年6月29日	オンライン ・防災委員会の取組について ・活動を効果的に進めるための意見交換
令和3年7月6日	オンライン ・JICA との交流についての打ち合わせ
令和3年7月13日	オンライン ・JICA との交流についての打ち合わせ
令和3年7月30日	オンライン ・大方・佐賀中学校への出前授業について ・出前授業に関する振り返りと共有
令和3年8月20日	オンライン ・JICA との交流についての打ち合わせ ・教科横断的防災学習について
令和3年9月10日	オンライン ・黒潮町地区防災計画シンポジウム（発表）の協議
令和3年9月29日	オンライン ・大方・佐賀中学校への出前授業について ・出前授業に関する振り返りと共有
令和3年10月12日	オンライン ・臨時情報について
令和3年11月25日	オンライン ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和3年12月6日	オンライン ・入野小学校への出前授業について ・入野小学校への出前授業に関する振り返りと共有
令和3年12月14日	オンライン ・臨時情報について
令和3年12月21日	オンライン ・臨時情報について
令和4年2月28日	オンライン ・次年度の取組について

上記の活動の他に、電子メール等によりカリキュラムの内容や評価、展開上の留意点等についてやり取りを行った。

④地域協働学習実施支援員について

指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けは以下のとおりである。

大方高校地域学校協働活動推進員 松田真紀氏（都度謝金払い） 18 回来校

大方高校地域学校協働活動推進員 西村優美氏（都度謝金払い） 12 回来校

活動実績

日程	内容
令和3年4月9日	地域連携についての協議（松田）
令和3年4月13日	地域連携関係者 訪問・協議（松田）
令和3年4月20日	地域連携関係者 訪問・協議（松田）
令和3年4月27日	地域連携関係者 訪問・協議（松田）
令和3年5月11日	地域連携についての協議（松田）
令和3年5月18日	地域連携についての協議（松田）
令和3年5月21日	地域連携についての協議（西村）
令和3年5月25日	総合的な探究の時間についての協議（松田・西村）
令和3年6月1日	総合的な探究の時間についての協議（松田）
令和3年6月15日	総合的な探究の時間についての協議（西村）
令和3年6月21日	運営指導委員会（松田・西村） 地域協働学習実施支援員として出席
令和3年6月22日	総合的な探究の時間についての協議（松田）
令和3年7月13日	総合的な探究の時間 3年生 PBL 中間発表会（松田・西村）
令和3年7月20日	コンソーシアム委員会（松田・西村） 地域協働学習実施支援員として出席
令和3年9月21日	総合的な探究の時間 3年生 PBL 発表会（松田・西村）
令和3年12月2日	地域連携関係者 訪問・協議（松田）
令和3年12月3日	地域連携関係者 訪問・協議（松田）
令和3年12月7日	総合的な探究の時間 3年生アイデア磨き（西村）
令和4年1月11日	総合的な探究の時間 3年生アイデア発表会（松田・西村）
令和4年2月1日	総合的な探究の時間 2年生アイデア磨き（松田・西村）
令和4年2月7日	運営指導委員会（西村） 地域協働学習実施支援員として出席
令和4年2月14日	コンソーシアム委員会（松田・西村） 地域協働学習実施支援員として出席

⑤管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・各種会議等における日程調整や情報提供
- ・円滑な事業執行のための学校への助言
- ・国費に上乗せした独自の支援や取組の実施
- ・地域協働学習実施支援員の配置
- ・高知県青少年赤十字高校生連合会総会との連携（コンソーシアム）
- ・発表会や研究会での評価者としての参加および評価者人材紹介（コンソーシアム）
- ・地域学の防災学習における助言（コンソーシアム）

⑥高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

令和2年5月25日に、「黒潮町と高知県立大方高等学校における防災・地域課題解決を担う未来の地域の創り手人材の育成に係る協定書」を締結した。

⑦事業終了後の自走を見据えた取組について

事業終了後も取組を継続させていくため、防災と地域課題解決に関する取組に対して継続した支援をもらえるよう、黒潮町と協定を締結している。

併せて、黒潮町の人口減少の中、大方高校の魅力化促進に向け黒潮町と継続協議を行うこととしている。

## 10 研究開発の実績

### (1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域学（地域学入門）探究学習	4回	7回	7回	5回	1回	5回	6回	7回	6回	6回	8回	
地域学（地域学Ⅰ）探究学習	6回	6回	8回	4回	2回	6回	6回	6回	6回	6回	6回	
地域学（地域学Ⅱ）探究学習	10回	14回	14回	8回	2回	12回	12回	16回	10回	8回		
総合的な探究の時間（1年）	3回	2回	6回	2回	1回	3回	2回	3回	5回	3回	4回	
総合的な探究の時間（2年）	3回	3回	4回	3回	1回	4回	3回	3回	3回	5回	6回	
総合的な探究の時間（3年）	3回	3回	8回	2回	1回	3回	2回	3回	3回	2回		
課外活動における地域との協働活動				1回		1回	2回		4回	2回	2回	

### (2) 実績の説明

#### ① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

本事業の中核となっている学校設定科目である地域学と総合的な探究の時間において、探究活動を位置づけた年間の活動イメージを、カリキュラム開発等専門家の助言をもとに作成した。その際、「情報収集力」、「情報分析力」、「情報編集力」、「判断・決定力」、「論理的思考力」、「表現力」、「批判的思考力」等の課題発見・解決に必要な力を、学年ごとに身に付ける目標を定め活動を決定した。

生徒には、年度当初に年間計画、ルーブリック評価、卒業までに目指す生徒像等を提示し、年間の見通しと身に付けさせたい力の共有を図り事業を進めた。進めるにあたっては、生徒の状況に応じてその都度手法を変更するなど柔軟に対応しながら展開した。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、計画していた取組が実施できないこともあったが、実施時期や時間数等を調整しながら、また、オンラインを活用するなどして学びの場が失われないよう、できることを進めていった。

#### ② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置づけ（各教科・科目や総合的な探究の時間、学校設定教科・科目等）

本年度は、学校設定科目である地域学、総合的な探究の時間、学校行事等で横断的な学習を計画した。

#### ③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

本年度は、各教科においての防災の観点を取り入れた探究的な授業展開について、カリキュラム開発等専門家である杉山氏を講師にオンラインにて研修会を開催した。また、学校行事においてもテーマと関連させた取組を行った。

#### ④ 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

研究開発のイメージを示したビジュアル資料をもとに職員間で共有を行い、下記の育てたい5つの力を育成するために、「総合的な探究の時間」の学年担当者、「地域学」担当で基本的に毎週協議を行い、学年団で共有を図った。

##### 【育てたい5つの力】

I 探究力	情報収集による課題理解・解決に向けた課題解決力
II つながる力	コミュニケーション・プレゼンテーション力、思いや願いの理解
III 多様性受容力	多様な人との交流や理解
IV マネジメント力	計画を立て取り組める力
V レジリエンス	厳しい状況の改善に向けた意識と実践

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

総合的な探究の時間の担当者や地域学の担当者、防災教育プロジェクトチームや生徒会担当教員などが連携しながら取組を推進している。地域との連携は本事業の事業統括主任である地域学担当教員や、防災教育プロジェクトチームの責任者である教頭を中心として外部との連絡調整を行い、各学年担当他に取組を進めるという形で推進した。

⑥カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

カリキュラム開発等専門家

- ・カリキュラム開発全般に関わる計画への指導助言
- ・発表会等における評価者としての関わりと教員との振り返り
- ・コンソーシアム委員会への出席・指導・助言

地域協働学習実施支援員

- ・地域人材との連携や活用に向けての連絡・調整
- ・運営指導委員会、コンソーシアム委員会、校内推進委員会における指導・助言
- ・授業を参加し、生徒の状態を見たとえでの教員との振り返り

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

カリキュラム開発等専門家との協議をもとに、担当者間の協議を基本的に毎週実施し進捗状況の確認や課題の洗い出し・改善方法の検討等を行った。特に、カリキュラム開発等専門家との協議は、オンライン会議システムを用いることにより多く実施することができ、きめ細やかな対応ができた。また、成果検証のアンケート結果等を管理職と分析し、取組状況と成果と課題等についての検討を行った。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

京都大学矢守研究室研究員の杉山氏には本校防災委員会の取組や避難訓練時の防災活動について意見や助言をいただいた。また、黒潮町情報防災課とつないでいただき、防災活動に関して地域と連携した取組を行うことができた。

大方高校地域学校協働活動推進委員の西村氏には、アーティスト in レジデンスという活動を行っている地元出身の写真家とつないでいただき、地域に芸術を取り込んだ活動の中で、生徒と一緒に「未来へのメモワール」を地域住民に取材していく活動をご提案いただいた。新型コロナウイルス感染症拡大のためオンラインで交流をした。来校して一緒に活動することはできておらず、次年度に検討していくことになっている。

山崎氏には、1年生のディベート大会では評価者として参加いただき、生徒の振り返りの時間にはコーチングの知識を生かしてファシリテーターをしていただいた。

高知大学次世代地域創造センター客員准教授の川村氏には、カリキュラム開発等専門家としての指導・助言のほか、プレゼンテーション練習や発表会の際に講評者として指導・助言をいただき、生徒にも直接関わっていただいた。

地域学校協働活動推進委員の西村氏は、授業や発表会において生徒と関わりをもっていたいただき指導・助言をいただいた。そのほか、オンラインによる外部人材との交流等における人材の紹介を多数の方にしていただいた。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導・助言等に関する専門家からの支援について

運営指導委員の方から、運営指導委員会において、本事業に対しての指導や助言をいただいた。特に、「OODAループの回し方やPDCAとのケースによつての使い分け」、「ループリック評価」、「振り返りの活用」、「探究活動の重要性」等については専門的な見地から指導・助言をいただいた。

#### ⑩類型毎の趣旨に応じた取組について

「防災」をキーワードとした探究活動を展開することにより、地域の「防災」や魅力化に向けた課題解決を進め、未来の「地域の創り手」人材の育成を目指した取組を展開してきた。生徒の自己評価や外部評価において、肯定的な評価をもらうことができた。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、地域の方々などを集めての発表会はできなかったが、校内での発表会をオンライン配信し、運営指導委員会やコンソーシアムの委員に発表を見てもらい、助言等をいただくことができた。

#### ⑪成果の普及方法・実績について

地域学・総合的な探究の時間に関する取組をホームページで紹介した。また、発表会をオンライン配信し、運営指導委員会やコンソーシアム委員会の委員が視聴できるようにした。3年生の探究活動の発表は、本事業を受けている学校にも案内をしてオンライン配信した。

毎月発行している「ソピアの旗だより」においても、生徒の活動の様子等を、県西部地域の中学校3年生とその保護者、黒潮町民に対して紹介した。

### 1.1 目標の進捗状況、成果、評価

#### (1) 事業実施において設定した目標におけるアウトカム目標の達成状況

実施したアンケートの結果分析から、現時点では全ての学年において目標を達成できているとは言えない状況であるが、今後の取組を通して達成に向けた期待は十分あると考えている。アンケートでは昨年より下がった項目もあるが、生徒の聞き取りからは、学んだからこそ自分ができるにないことに気づき、評価を下げたという声も聞かれ、今後に向けての意欲を感じた場面もあった。

高知県教育委員会が独自に実施する「高知県オリジナルアンケート」（別添資料）については、全体的に見ると肯定的な回答が多く見られたが、目標として設定（目標設定シート）している「地域への貢献等の活動を通して、自己効力感や自己有用感をもつことができた」、「地域の課題解決に取り組むことにより、自身の将来の夢や目標をもつことにつながった」と回答する生徒の割合は、目標値を大きく下回る結果となった。コロナ禍ではあるが、オンラインによる交流等も多数行い、昨年より交流できている。しかし、対面での活動やボランティア活動等が制限されたことは目標値を大きく下回る結果の大きな原因の一つであると考えられる。

「物事に取り組む際には、目標を立てその達成に向けて努力することができる」と回答している生徒の割合は70%であり、昨年の80%より下がる結果となった。生徒の様子では、探究活動を通して見通しを立て、それに向けて最後まで取り組むことができるようになってきているが実感できていない生徒もおり、今後振り返り等でできたことを確認させていきたい。

地元（本校の設定は県内）への定着率については、約75%の生徒が地元での進学・就職が決まっており、県内就職者は89%となっている。

「高校魅力化評価システム」では、学年別に振り返ると、1年生は「複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ」の割合が74.2%と、他の学年と比較してもかなり高い水準である。これは、ディベートや論ずる活動などの答えのない問いに複数回挑戦させたこと、プランニングや構造化といった技法も回数を重ね習得させたことの成果と思われる。一方、「相手の意見を丁寧に聞くことができる」の割合が83.9%と、他の学年と比較してもかなり低い水準である。ディスカッション等でも、自身の考えを相手に伝えることに夢中になっており、建設的にコミュニケーションをとることができていない場面もあり、相手のことを考えられるようにさせていきたい。全体として、答えのない問いにあきらめず考え抜く力（探究の基礎）は1年間で一定醸成された。次年度も多角的に物事を捉え探究活動を行っていくとともに、ディスカッションする力や受容する力を身に付けさせていきたい。

2年生は、粘り強さの項目が高く、中でも、「うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む」が高かった。答えのない課題に対して1年間取り組んできたことが結果につながったと考えられる。一方、表現力の項目が(55.4%)と他学年と比較しても低い。答えのない活動に取り組ん



できたが、答えがないからこそ自分の出した答えに自信をもてず、その結果それを表現することに苦手意識をもっていた可能性がある。次年度は、正解のない活動であることを生徒に何度も周知していき、ダメ出しをされてもよりよい答えに何度もチャレンジする雰囲気づくりを学年団でしっかり行っていきたい。

3年生は、社会性に関わる自己認識が全体的に向上しており、特に「社会参画意識」が上昇している。これは、総合の活動で、社会が抱えている課題解決学習に取り組みさせたことで自己肯定感とともに社会人としての意識も芽生えたのではないかと考える。一方、課題設定力の「現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる」が昨年度と比べ減少している。また他学年と比べても低い水準である。これは、総合で実施した課題発見学習において、課題設定に関するルーブリック評価を基に指導者の評価と自分自身の評価を定期的に付けさせていたことで、自分基準ではなく、客観的に自分を捉える機会が増えたことが要因だと推察する。今年度の活動で課題発見の難しさを自覚したと述べる生徒も多数いたので、良い意味で実力を客観的に捉え始められたのではないかと思う。

アンケート結果では、指導者の認識と生徒の認識にずれがある項目も多く見られる。そのため、フィードバックを丁寧に行える時間を設ける必要があり、指導者の評価と指導の一体化を着実に実践し、生徒の成長・変容を捉え、適切にコーチングする力を養う必要を感じる。次年度のカリキュラム作成にあたって、分析結果を教員間で共有し、効果的なカリキュラム設計を図っていきたい。

実施したアンケートは以下のようになっている。

	項目 アンケート	実施主体	対象	実施時期	実施形態
1	高校魅力化評価システム	三菱UFJリサーチ&コンサルティング	生徒・地域住民等	令和3年11月	選択
2	防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート	大方高校	生徒	令和3年9月、 令和4年1月	選択・記述
3	高知県オリジナルアンケート	高知県教育委員会事務局 高等学校課	県立高等学校の生徒	令和3年4月・11月、 令和4年2月	選択

## (2) 発表会や各種会議の開催・参加

地域学においては出前授業を行うとともに、ふるさとキャリア教育における発表も地元ケーブルテレビで配信をした。また、総合的な探究の時間では、様々な活動を運営指導委員会やコンソーシアムの委員の皆様、オンライン配信により視聴していただき感想等をもらうとともに、地域協働学習実施支援員やカリキュラム開発等専門家の方に参加（オンライン含む）いただき、生徒への講評をしてもらった。

教職員が参加した会議等には以下のものがある。

時期	テーマ他	参加者数	実施主体
4月	校内研修会 ・テーマ「これからの総合的な探究の時間の考え方」 高知大学次世代地域創造センター川村晶子准教授 ・テーマ「コーチング」 NOKs labo 山崎直子	20名	大方高校
12月	オンラインイベント 高校探究プロジェクト 瞳輝く学びの実装化 ～生徒のため、教師のため、未来のため～	4名	東京学芸大学
1月	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業全国サミット」	7名	文部科学省

### (3) 地域でのフィールドワーク等や連携した活動の実施

フィールドワークやインタビューを実施するのが難しい状況ではあったが、少人数対応やオンライン会議システムの活用、感染状況が比較的落ち着いた時期に以下のことを実施した。

時期	テーマ	内容
4月	新しい避難場所の整備	住民との避難路検証で新しく設定された、避難場所にベンチを設置し、桜の木を植樹
10月	出前授業	大方中学校、佐賀中学校2年生との交流授業。「未来へのメモワール」「オリジナルHUG」を中心とした授業を実施
10月	町内のお店を知る	「黒潮町のみんなが幸せになる買い物」を考えるにあたって、現状の買い物を知る、お店の人の声を聞くために町内14か所のお店にインタビューを実施
11月	津波避難タワーを清掃しよう	地区内の津波避難タワーが、高齢化の影響もあり長年清掃活動ができない状態にあることを聞いた生徒たちが、清掃活動にチャレンジ
11月	活動の発表	黒潮町地区防災計画シンポジウムで、地域学の活動を中心とした本校防災活動を発表
12月	ディベート	「日本の教育政策として、制服を廃止すべきである」というテーマでディベートを開催
1月	出前授業	入野小学校5年生との交流授業。「未来へのメモワール」を中心とした授業を実施
1月	ワールドカフェ	13名の社会人と、「未来の仕事について考える」をテーマに、オンラインでディスカッションを行った。
1月	高齢者との避難訓練	町内の芝地区の高齢者の散歩コースである入野の浜から、巨大地震発生の想定のもと、発生から5分後に3方向に分かれて避難開始。逃げトレアプリを活用して避難場所までの経路確認と安全確認の訓練の実施
2月	アイデア磨き アイデア発表会	「黒潮町みんなが幸せになる買い物」のアイデアを外部の方に発表し、アドバイス・ご意見をいただき、それらを基にアイデアを練り直し、発表会を実施

### 1.2 次年度以降の課題及び改善点

昨年度の課題であったルーブリック評価を本校の「目指す生徒像」にそって作成し、本年度当初に教員間で共有した。生徒にもオリエンテーションで示し、各単元においても示した。昨年よりは目指す姿、付けるべき力のイメージができたと思うが、まだまだそのメリットを生かし切れていない。

探究学習を「自分ゴト化」できず、主体的に学習に向かえない生徒に対する指導・支援方法が課題となっている。コーチングなどの教員研修も必要となってくるが、まずは学年団内で困り感や進捗状況の共有ができる環境づくりが必要である。定期的な共有会を週に1回開催する方向で調整している。

## V 探究活動の柱となる科目のカリキュラムと再構築に向けた取組

### 1 「地域学」における各学年の取組

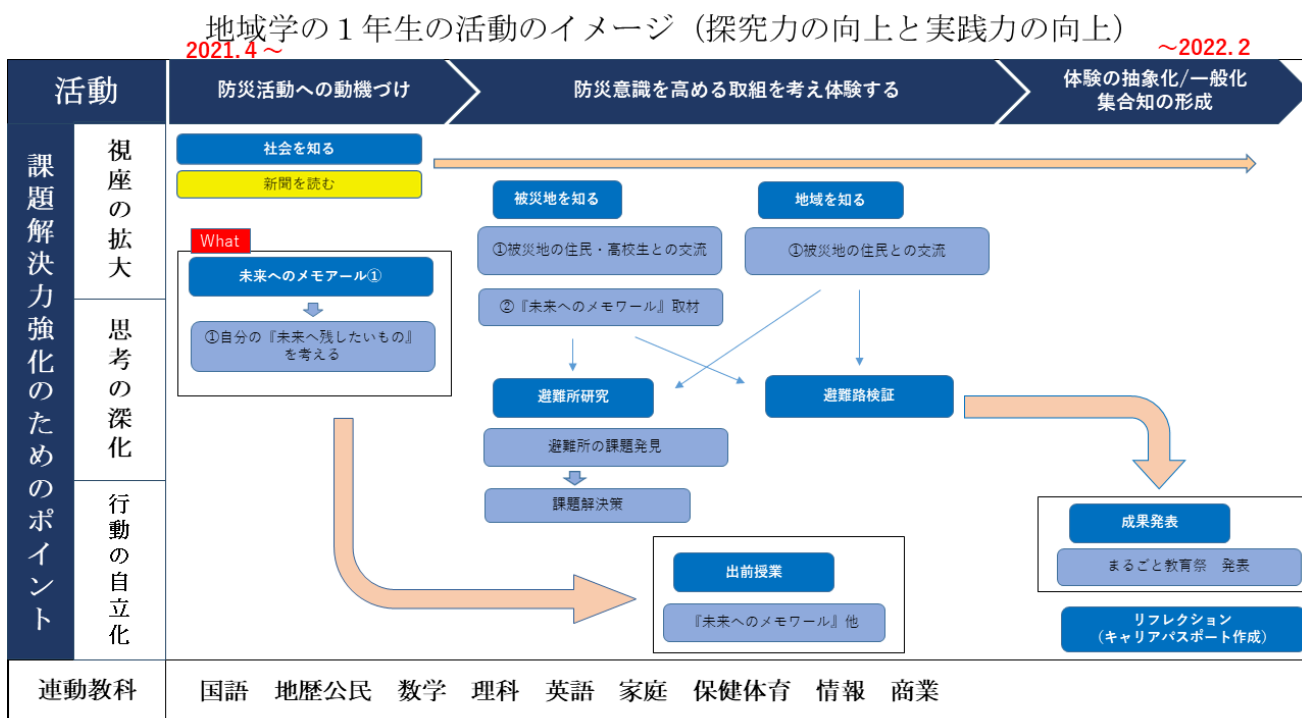
「地域学」は学校設定科目として平成 29 年度からスタートした科目であり、地域創造コースを選択した生徒が受講する。「地域学」では、1 年次に「地域学入門」、2 年次に「地域学Ⅰ」、3 年次に「地域学Ⅱ」を受講する。各年次の担当教員は地歴公民科・国語科・家庭科・商業科の教員が担当し、主担当は地歴公民科の教員が担っている。

なお、「地域学」における視覚的なカリキュラムの内容については、カリキュラム開発等専門家で矢守研究室の研究者であり、本校の防災教育のアドバイザーでもある杉山高志 氏を中心に検討したものである。

#### (1) 「地域学入門」(1 年生) の取組について

##### ア 概要

1 年生では3年間の基礎となる「黒潮町」「防災」の知識を習得し、その活動の中で特にコミュニケーション力、多様性受容力、つながる力、探究力の育成を目指す。以下に活動のイメージ図を示す。



##### イ 生徒観

全体的に明るく活発な生徒が多く、男女でのコミュニケーションもとれるが幼さが残るところが多々あり、まだまだ社会性が乏しい。防災についてもまだ経験も知識も乏しい。新型コロナウイルス感染症対策を工夫しながら、実践を重ねていく必要がある。

##### ウ 活動報告

###### 「未来へのメモワール」

「未来へのメモワール」とは、災害から守りたい大切なものを考えることで、災害に対し

て備える意識の向上を目的とする活動である。被災時に守りたい大切なものを考え、守るための行動とは何かに結び付けていく。同時に、普段、気にも留めなかったものが実はかけがえないものであったと気づき、あたりまえの生活への感謝や大切なものの存在について、あらためて見つめ直していく。3年間取り組む「防災学習」の基本となるプログラムとして1年生の当初に定着させたいと考えている。

考えていく過程で、自分の生活がいかに多くの人や思いに支えられているか気づき、大切なものをなかなか一つに絞ることができなかったが、自分自身を見つめ直すきっかけになっていた。次年度はこのメモワール活動を発展させ小中学校への出前授業とあわせて、さらに地域住民の方にも広げていきたいと考えている。

未来へのメモワール
自分の住んでる町を残したい

<p>その理由</p> <p>小さいころから、この黒瀬町に住んでいて、お世話になっているからです。都会のほうが色々なものがあるって生きやすいかもしれないけど、自分が住んでいる所は、地域の人達との関わりが多く、思い出深い場所だからです。私の町では、命を守るために地域の人達だけで高台に上がる津波避難訓練をやってきました。</p> <p>もし、地震が起ったら、今の住みやすい地域は一瞬でなくなると思います。少しでも今の風景が残るように今の町の風景を写真に残しておきたいです。そして、災害後は少しでも今の町の風景を復活させたいです。災害が起ったら、今と同じ住みやすい地域は戻らないと思うけど、写真に残すことで、少しでも災害前の町の風景を思い出せることができたらと思います。</p>

『未来へのメモワール』生徒作品

未来へのメモワール
アクアスロン大会を残したい

<p>その理由</p> <p>私の家の近くで開催されているので、小学生の時からボランティアをしてきました。</p> <p>このボランティアは、私が、はじめてやったボランティアでした。ボランティア内容は、泳ぎ終わって、走っていく選手の人にお水やアクエリアスを配る仕事でした。初めてやることなので、とても緊張しました。でも、何も知らない私に、三人くらいできていた人に声をかけられました。そのあと、その人たちが出る番になって、私はその人たちが来るのを待って、その人たちに、アクエリアスを配りました。</p> <p>その時、「ありがとう」と言われて、とても嬉しかったです。その時、とてもやって良かったと思います。だから、今は手伝いに行ける日には、手伝いに行っています。</p>

未来へのメモワール
Hちゃんとの写真を残したい

<p>その理由</p> <p>なぜ私がHちゃんとの写真を残したいかというと、私が一番大切にしている友達だからです。Hちゃんとは中学校からの友達で、Hちゃんはバレー部でいつも明るくて優しい人でした。私が辛い思いをしていたり悩んでるときに一番に声を掛けてくれていつも相談のってくれました。</p> <p>私が、何かを頑張った時にはいつも褒めてくれました。行事の時もいつも応援してくれました。例えば、体育祭の時に私が応援リーダーでクラスの人たちとぶつかり合うことが多く、応援リーダーをやめようと思っていた時にHちゃんが私に言ってくれた言葉で、応援リーダーをもう一度頑張ろうと思えました。そんなHちゃんが私にとって大切な存在です。</p> <p>今は、離れ離れだけどHちゃんとの写真を残るといつも頑張ろうと思えます。災害から残すためには、コピーしている写真を備蓄袋に入れておきたいです。また、Hちゃんとの写真が携帯に入っているので災害が起ったときはその写真が入っている携帯を持って逃げたいと思います。</p>

『未来へのメモワール』生徒作品

### ＜避難所研究＞

本校は被災時に地域の避難所となる。平日に被災すれば地域の住民とともに避難生活を強いられることから、3年前、生徒の発案で大方高校オリジナルのHUG（避難所運営ゲーム）を作成し、いざというとき、避難所を運営して地域に貢献することをめざしている。毎年、

1年生には市販のHUGとオリジナルHUGを実践させ、避難所運営についてイメージさせている。これまでは学校全体や小学生、地域住民とも実践してきたが、新型コロナウイルス感染症の影響のため実施できていない。そのため、様々な個別の学習後に受講者でオリジナルHUGを実践する形を繰り返し、実践ごとに疑問や解決策を考えていく方法をとっている。しかしながら、校内外の人との実践を通して様々なニーズや意見を生の声で聴く活動は大きな意義があり、今後感染症対策を考えて、できるだけ多様な人々と実践を重ねていきたい。

この授業を通して、生徒たちの気づきは「判断しかねることが多く、知識や経験が必要である」、「高齢化が進んだ黒潮町において避難、避難所生活ともに高齢者に対応していかなければならない」ということであった。避難所研究においては正解のない「問い」を探究し続ける必要があり、3年間にわたるテーマである。

HUG番号	HUGの内容	難しかったところ	どうすればよい、何がわかればよい、何があればよい
例 17	毛布200枚到着 おろす場所決める	毛布200枚分のスペースがどのくらいか	避難所の物資を置くスペースを決めておく
8	受付を作ろうと言った	どこに作ったらいいか分からない	最初から決めておく 体育館の一階食堂の入り口
9~11	家が全壊、高齢者	場所	場所を決めておく 体育館一階格技場
12~15	一部損壊、高齢者	床に寝ころべない	ベッドを構えておく 備蓄しておく エアーマット、段ボール
6.4・6.5	両親を失った3歳と5歳の姉弟	誰に面倒を見てもらうか	近所の人が分かれば一緒にいられる
4.1~4.4	長女は重度の知的障害、世帯主は額から出血	どの場所に案内するか	障害者が安心して過ごせる場所を設ける 会議室

オリジナルHUGワークシート 一部抜粋

### 〈災害伝承から学ぶ〉

災害伝承を読み解き、過去の災害から学び現代の防災に生かす取組を行った。また、そこに書かれている地名や地形、歴史を読み取り、黒潮町について知ることもできた。

今回は宝永地震を伝える「谷陵記」と安政地震を伝える「入野賀茂神社震災碑」を読み、地震の揺れの大きさや津波の様子から耐震や家具固定、できるだけ早い避難の必要性を改めて学んだ。とくに「谷陵記」は当時の被害を現在のハザードマップと比較することで、今後発生する南海トラフ地震の被害想定を確かなものとして認識していた。そのうえで各地区へ備えを呼びかけるチラシを作製した。



過去の歴史から、、、  
津波は佐賀の「白浜」まで来ました  
山の近くに住んでいる人の家は少し残ったが後は流されてしまいました、、、

**津波は危険です！！**  
**諦めないで生き抜きましょう。みんなの力で乗り越えよう！！**

※自分の命は自分で守る。早く逃げてください！！

各避難場所に避難して下さい



備えを呼びかけるチラシ 生徒作品

## (2)「地域学Ⅰ」(2年生)の取組について

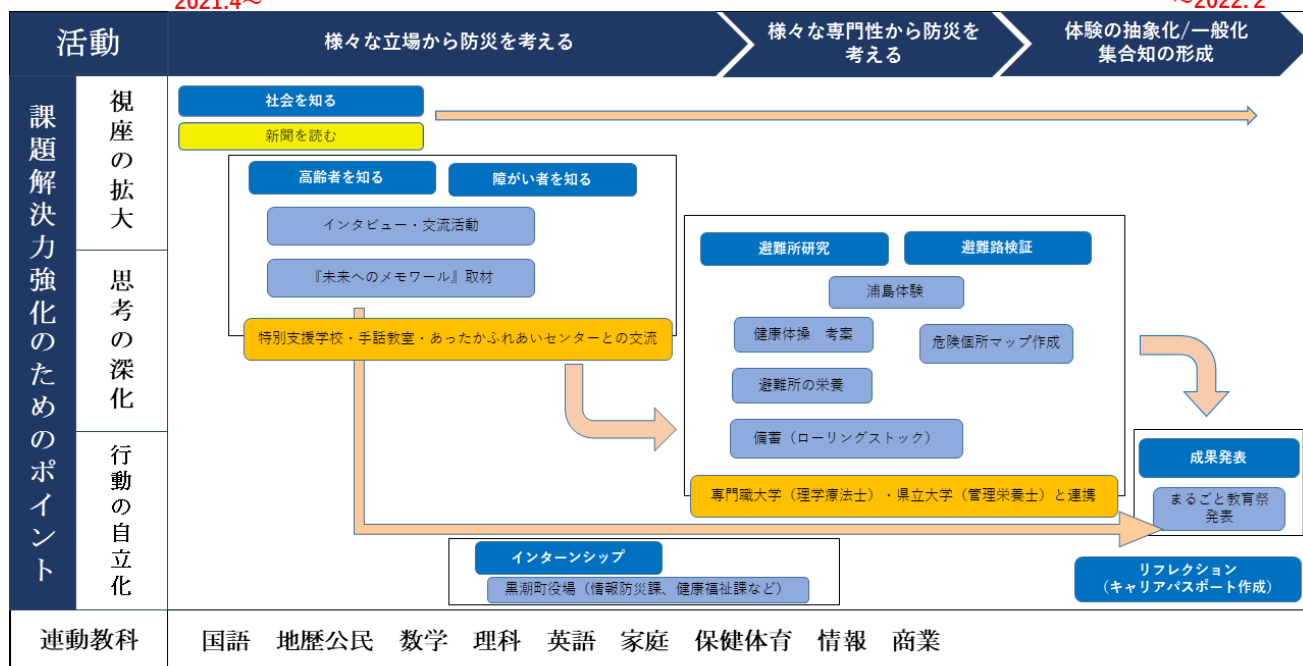
### ア 概要

「未来へのメモワール」を中心につながる力、多様性受容力、レジリエンス、探究力、マネジメント力の育成を目指す。新型コロナウイルス感染拡大の影響で例年に比べ、地域住民と連携した活動ができなかった。しかしながら、近隣の小中学校の協力と Zoom を活用して交流学習を実施することができた。以下に活動のイメージ図を示す。

### 地域学の2年生の活動のイメージ (探究力の向上と実践力の向上)

2021.4~

~2022.2



### イ 生徒観

防災学習に対して意欲的な生徒が多く、入学の目的が本校での防災学習であった生徒も複数いる。防災に関するオンライン会議に参加して、他県の高校生と防災について意見交換している生徒たちがリーダーとなって活動している。

### ウ 活動報告

#### 〈出前授業〉

昨年度に引き続き地元の小学校、中学校への出前授業を行った。入野小学校の5年生と大方中学校2年生には「未来へのメモワール」を、佐賀中学校2年生には「オリジナル HUG 実践」を中心としたプログラムを実施した。アイズブレイクの内容を含めた授業案は高校生が考えた。

昨年度、小学校で行った出前授業で「未来に残したいものを上手く引き出せなかった。」「考えを深めてもらえなかった。」など反省点が多



出前授業(入野小学校)の様子

かったことから、次回の出前授業に対する思いは強いものがあった。「今度こそは」と、準備段階から意欲的に取り組んだ。大方中学校との授業の振り返りでは、「深く考えてくれた。」「前回よりメモワールの説明や目的を上手く伝えることができた。」とあり成果が感じられた。

中学生の振り返りには「積極的に話しかけてくれたので、活動しやすかった。」「高校生同士で助け合いながら進めているところもすごいと思った。」「困っていると助けてくれた。」とあった。また、「防災リュックをかまえておきたいと思った。」「備蓄袋の置き場所を玄関にしようと思った。」という実際の行動につながる意見もあった。この活動の目的は、自分と違う立場や年齢の人といかにコミュニケーションが取れるか、備えや避難に関する相手の意識を変えられるかどうかの2点である。中学生の振り返りからは生徒たちが活動の目的を理解し、成果があったと評価できる。

佐賀中学校との「オリジナル HUG 実践」においても「高校生がリードしてくれた。」「分かりやすく教えてくれた。」「人と人との協力があってこそだと思った。」「今日生まれた疑問は考えていきたいと思いました。」という振り返りがあった。避難所で起こりうる出来事を協力して調べ、HUGのイベントカードを作成するという課題に班ごとに分かれて協力して行う活動であったが、その目的を理解し達成に向けて努力する姿が高校生・中学生ともに見られた。こうした異年齢集団との交流については、社会性の成長が大きいことから今後も継続し、小中学生だけでなく地域住民との交流も実施できればと考えている。



出前授業（大方中学校）の様子



出前授業（佐賀中学校）の様子

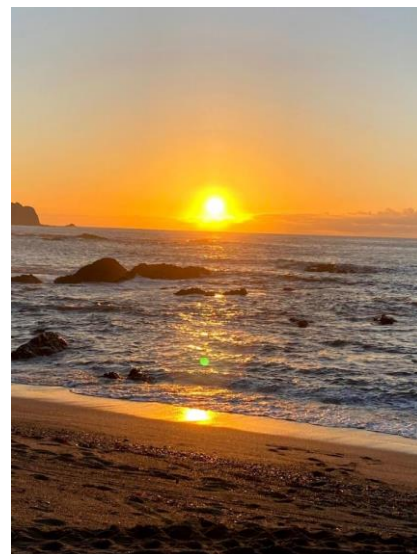
#### 〈家族のメモワール〉

2年生は避難意識の向上やかけがえのない日常への思いを再確認してもらう目的で「未来へのメモワール」の取組を多方面に広げている。写真家 桜木奈央子 氏と交流する機会をいただき、メモワールを写真で表現する取組を行った。桜木氏は高知県出身で神奈川県在住の写真家である。本校地域協働学習実施支援員 西村優美 氏の紹介で交流が始まった。

桜木氏に「相手に伝わる写真の撮り方」を教えていただき、「家族のメモワール」を取材する課題に取り組んだ。祖父母や親に取材した生徒が多かったが、ほとんどが家族や子ども、家族の写真を残したいという答えであった。生徒たちは「あらためて自分が親や家族に大切に思われているということが実感できた」という感想をもっていた。この取材を通して家族

への思いや大切さ、自分の存在の大切さを感じ取ることができたと思われる。防災教育には色々な教育が内在しているが、この取組は人権教育にもつながっている。

桜木氏はアフリカのウガンダに取材に行かれ、長年支援をされていることから生徒たちにウガンダの内戦の実情と悲劇を語っていただいた。生徒からのウガンダについての質問の中に印象的なものがあった。「ウガンダに地震が起こったらどんなことが一番困るのか？」という質問に対し、桜木氏の答えはこうである。「ウガンダの家は自分たちで建てた木造の家で、周囲に高い建物はなく、電気も水道も元々ないので、家に押しつぶされないように逃げさえすれば、そんなに生活に困ることはない」。この答えに生徒たちからは「便利さを求めた生活が被災時には人間を物質的にも精神的にもしんどくさせるのか」という「問い」が生まれた。彼らのこの「問い」とSDGsを掛け合わせて、来年度「持続可能・・・」というテーマで平時、非常時が両立する黒潮町の防災について考えさせることを計画している。



家族のメモアールの写真  
弟の残したいもの 海

#### 〈避難所運営訓練から考える〉

11月に全校で避難所運営訓練を行った。今までのようなHUGを用いたものではなく実際に避難者側と運営側に分かれ、実際の避難所になる本校体育館を使い、また要配慮者を含めた色々な立場の避難者を想定した訓練であった。学年を縦割りにして班を作り、それぞれにミッションが出され、協力しながら解決していくというものである。授業では全校生徒の振り返りアンケートの分析をもとに学校と全校生徒に備蓄について要望や呼びかけを行うこととした。「避難所の中で困ったこと」、「備蓄しておいた方がよいもの、準備しておいた方がよいこと」というカテゴリーに分け、アンケート内容を分析した。

また、「避難所としての大方高校の強み・弱み」を考え、要望すべきもの、呼びかけるべきことを提案書とチラシの形で作成した。学校へは太陽光パネルの設置や毛布・スプーン・カイロなどの備蓄物資の追加を要望する。特に太陽光パネルについては黒潮町役場住民課課長 宮川氏に黒潮町の“ゼロカーボンシティ”の取組と、平時の“脱炭素”と非常時の“地域レジリエンス”が同時にかなう太陽光パネルの活用について説明を受けた。SDGsの視点から防災を考えるというヒントをいただき、生徒たちは提案理由に加えた。校長への提案は次年度の活動に繰越される。

また、全校生徒への呼びかけはこれまでの行ってきた「個人の備蓄袋を学校に」というものである。次年度は新入生を迎えて、改めて全校生徒に呼びかけていく予定である。

信じられるベンチを  
あなたに

新しくできた避難場所です。  
場所は役場前のT字路前です。



大方高校地域創造コース3年

チラシ作品

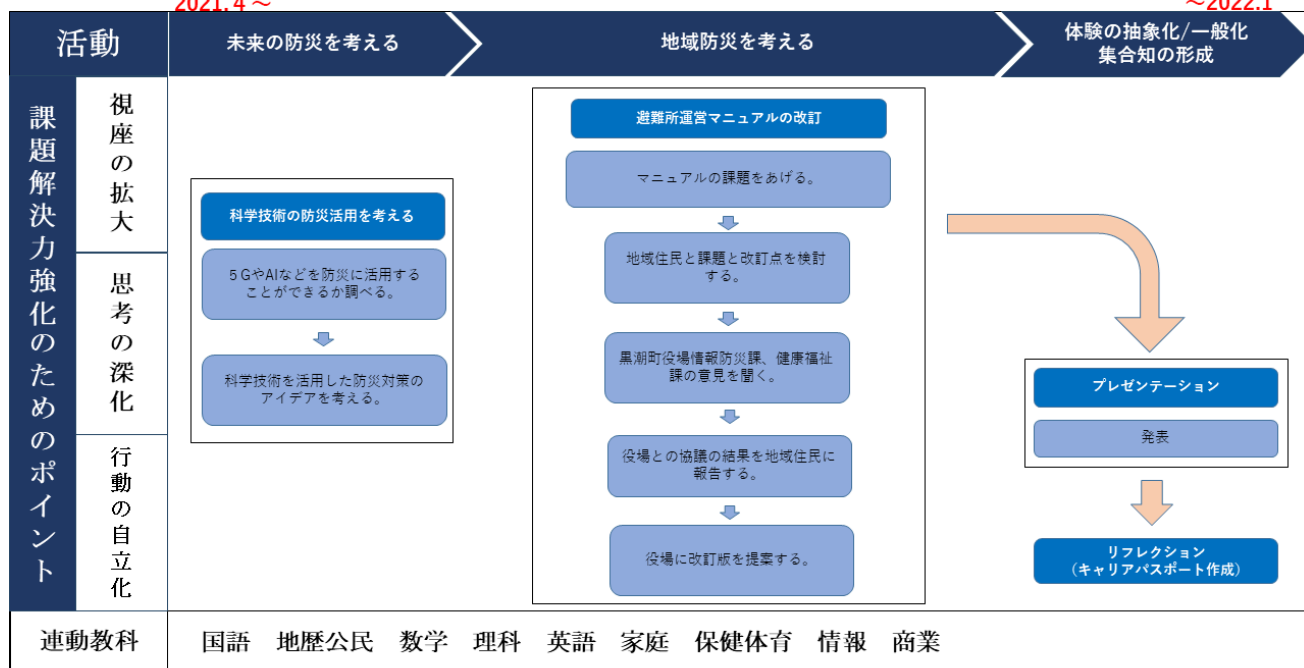


### (3)「地域学Ⅱ」(3年生)の取組について

#### ア 概要

3年間の集大成として、地域に貢献する力を身に付けるべく、具体的な貢献策を提案し実践を行った。地域の協力も得ることができ、成果を出すことができた。以下に活動のイメージ図を示す。

地域学の3年生の活動のイメージ (探究力の向上と実践力の向上)  
2021.4～ ～2022.1



高知大学川村晶子委員准教授作成のシートを活用

#### イ 生徒観

受講生徒は6名と少なく、様々な活動において他の学年より協力することを求められた。それぞれの個性や思いもあり、当初はなかなか協力し合うことができなかったが、課題にぶつかるたびに、徐々に協働する力を身に付けていった。

#### ウ 活動報告

##### 〈新しい避難場所の整備活動〉

この活動は昨年度から続けているもので、道路の改良に伴い新しくできた道路横の広場を整備し地域住民に周知を図る取組である。もともとは、本校生徒防災委員会が地域住民との避難路検証の結果、この場所が、津波からの一次避難場所となりうる事が判明した。国土交通省所管の土地であることから避難場所としての活用を提案して許可された。整備に協力してくれる事業所を探していたところ、地元の山本建設さんがベンチの設置と桜の木の植樹をして



ベンチの設置の様子

くださることになり、4月に整備が行われ、生徒も作業の一部に参加させていただいた。桜の植樹は春休み中であったので、生徒防災委員会のメンバーも参加した。ベンチの設置は地域創造コースの2年生とともにいった。

この場所はなだらかな坂の上に位置し、住民の散歩コースの途中にある。生徒たちは「普段の散歩と避難訓練を兼ね、休憩ポイントとして普段使いにも活用してほしい。そのためまずはベンチの設置が必要。」という考えであったので、さらなる整備を計画した。それは、1年を通して花が咲くような広場をイメージしてのものであった。しかしながら、花を植えるとなると土やプランター、花壇にするのであればレンガ、そして花の種や苗などの購入資金が問題となった。そこで、住民にこの場所を知ってもらうことを兼ねて資金を募ることにした。ポスターを作製し、地元のコンビニエンスストア、ドラッグストア、駅、スーパーに一定期間掲示してもらった。また、黒潮町地区防災シンポジウムで呼びかけをし、募金箱を設置して協力をお願いした。さらに動画を作製し、一定期間ではあるが地元のケーブルテレビで放送していただいた。今年度中には実際の作業までには至らなかったが、次年度後輩に引継ぎ、周知活動も合わせて本格的に計画を実行していく予定である。



桜の木の植樹の様子



募金を呼びかける動画のワンシーン

#### 〈ポリ袋調理実習〉

「コロナ禍で被災したとき、避難所の食事をどうすればよいか？」という課題に取り組んだ。①個人別であること、②備蓄品を活用できること、③温かい食事ができること、④簡単に調理できること、この4点をふまえて考えついたのが、ポリ袋で1人分をつくるカレーであった。具材は缶詰の焼き鳥、コーン、トマトジュースである。食材を考えるとローリングストックしやすい食材を考えた。そして、実際にカレーを作る実習を行った。ご飯は竹飯ごうで炊いた。



ポリ袋で調理したカレー

実習後「意外とおいしかった。」「コロナのことを考えると有効な手段」、「洗い物がないので、備蓄の水を有効活用できる。」「レトルトカレーはアレルギーの問題があるが、個人でつくると除去も可能」、「材料を入れた後、ポリ袋内の空気を抜く必要があることなど、一度経験しておく方が良いと思った。」という感想がでた。

また、全校生徒で行なった避難所運営訓練でも実践した。一人分の水分量に伝達ミスがあったため、「まずい」（生徒の感想）カレーになったことから、「避難所の混乱の中ではレシピや作り方を伝えるのは難しいので、レシピ集を作成する。」という新しい課題を見つけていた。



竹飯ごうで炊いたごはんとポリ袋で調理したカレー

#### 〈臨時情報を学ぶ〉

京都大学防災研究所の矢守教授と杉山研究員に Zoom で「臨時情報」に関する授業をしていただいた。そして、「臨時情報」が出た際の行動について、「マイストーリー」を作製した。

ほとんどの生徒が学校にいる時間帯に「臨時情報」が出されると想定し、避難所を開設してその運営に貢献している自分たちの姿をイメージしていた。そこに地域創造コースや防災委員会の仲間と協力するという記述があったことは“協働する力”の必要性を認識していることが実感できた。また、これまで避難所運営について学習し、考えてきたことを実践する様子が書かれていたことも、これまでの学習や活動が成果となって表れていると感じた。

2年生の地域学Ⅰの生徒たちも同様に授業を受け、「マイストーリー」を作製した。2・3年生に共通することであるが「避難生活は物質的に、精神的に苦しい」、「簡単なものではない」ものであるが、地域や避難してきた人々に自分たちが「貢献する」、「貢献しなければ」ということが述べられていたところに、様々な人に関わっていただいた取組が成果に結びついていると強く感じた。

#### 『臨時情報』振り返りシート

【1】『臨時情報』について、今回新しく知ったことを書く。

- ・最短でも2時間以内に発表される
- ・一部割れやゆっくり滑りという言葉

【2】2回の授業への取り組み方はどうだったか。自己評価をする。

- ・自分なりにしっかり考えることができたし、質問とかもできたからよかったけど具体的にマイ・シナリオを考えたとき深くまで考えられなかったのもし次があるなら、もっと具体的に書いていきたい

【3】『臨時情報』のことを社会に伝えていくために、自分（達）ができることは何か。また、今後どんなことをやってみたいか（アイデア）書く。

- ・地区の話合いの場で臨時情報のことを伝える
- ・出前授業で臨時情報についてやる → 生徒が知る → 親も知る → 家族会議
- ・家族での防災会議などを開いてみる

#### 臨時情報学習の振り返りシート

## 2 「総合的な探究の時間」における各学年の取組

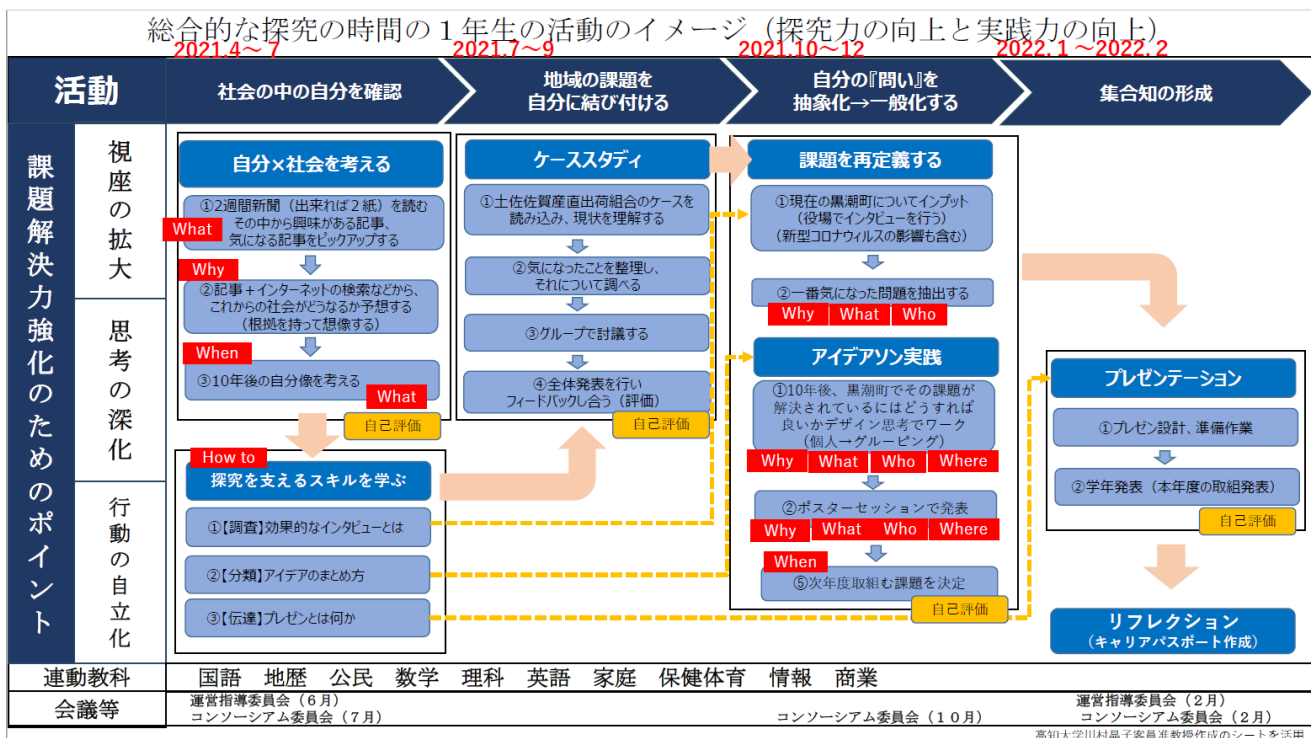
本校の「総合的な探究の時間」は、大方商業高等学校から多部制単位制普通科の大方高等学校に改編された平成17年度から、「総合的な学習の時間」としてスタートした。「総合的な学習の時間」の展開は、「自律創造型地域課題解決学習」として位置づけ、地域をフィールドとして地域の課題解決学習を地元の事業所と連携して進めてきた。本事業では、この活動を深化させ、地域をフィールドとして探究活動を推進し、学校内の力だけではなく学校外の力を借りて展開していくこととした。

カリキュラムの内容については、カリキュラム開発等専門家である高知大学次世代地域創造センター 客員准教授 川村晶子 氏を中心に検討したものである。

### (1) 「総合的な探究の時間」1年生の取組について

#### ア 概要

1年生は、探究力の基礎として、「情報収集力」、「情報分析力」、「判断・決定力」、「論理的思考力」、「表現力」の5つの力を身に付けることを目標に活動を行った。年度当初に年間計画、(OODAに基づいた)ルーブリック評価を提示し、1年間の見通しをもたせ、身に付けさせたい力の共有を行った状態で授業が始まった。年間を通して、「人が働くということ」をテーマに、「自分×仕事」、「他者×仕事」という切り口で探究活動を行った。以下に活動のイメージ図を示す。



#### イ 生徒観

1年生は、全体的に明るく活発であり、物事に対して一生懸命に取り組むことができる学年である。男女でのコミュニケーションもとれている。一方で、コミュニケーションをとることが苦手な生徒も一定数おり、活動や話し合いもリーダー性を発揮する生徒の意見だけが尊重されるような一面もある。

## ウ 活動報告

活動は、下図のOODA ループに基づいたルーブリック評価を生徒に示し進めていった。

単元1「自分×社会を考える」ルーブリック評価					
観点/レベル	1	2	3	4	5
到達レベル		規準		到達目標	
観察および情報収集力	情報収集ができておらず、自身の推測や予想のみである。	情報収集は一定できているが、一面的な見方で情報の収集がなされている。また目的がまぼくりしていないので、情報の内容に一貫性がない。	情報収集の目的は明確である。多くの情報源から情報を得ようとしているが、視点が一方的であるため、やや情報の内容に偏りがある。	収集の目的が明確であり、多くの情報源から情報を得ることができる。固定観念に囚われず、多面的な視点をもって多くの情報を収集できる。	多角的な視点を持ち、複数のデータの収集を行い、過程や根拠を明確化している。また、正確性も高く収集源も明示している。
分析力	情報の分析ができておらず、根拠がない情報があることにも気づけない。	情報の比較分析が甘く、情報の羅列になっている。主観性が強く根拠が弱い。説得力に欠ける内容である。	情報の比較分析が一定できている。根拠を持って思考できている。思考に関しては、論理的思考にとどまり、批判的思考は行っていない。	情報の比較分析が一定できている。根拠を持って、論理的・批判的に思考できている。	情報の比較分析が一定できている。根拠を持って、論理的・批判的に思考でき、的確な言葉でアウトプットできている。
判断、決定力	根拠や具体性がない。主観的であり、思考が浅い。実現に向けたプロセスも漠然としており実現性が低い。	根拠が弱く具体性に欠ける。インプットや予測との結び付きが弱く、主観的である。実現に向けたプロセスも自身の考えのみで実現可能かは不透明である。	根拠や具体性が一定ある。社会に与える影響が主観的で、社会との結びつきが少し弱い。実現に向けたプロセスに具体性はあるが、偏りがある。	根拠や具体性が一定あり、視座を高めて社会に与える影響を考へることができている。実現に向けたプロセスを多角的に考へることはできている。	根拠や具体性があり、社会に与える影響が根拠をもって明示できている。また、実現に向けたプロセスも細部まで考へられており、実現性が高い。
表現力	他者の方を借りないプレゼン資料が作れない。他人よがりな発表が自分事になっていない。	探究した内容をアウトプットできておらず、本質や過程が聞き手に伝わっていない。	何を伝えたいのか概ね理解できるが、伝え方が情報の羅列になっている。	聞き手側に立ったストーリー展開、手法の選択が出来ている。多様な人たちが納得できる視点で表現している。	インプット・予測・10年後の自分像に強い結びつきがあり、それをストーリー展開、的確な言葉の選択、効果的な表現ができています。

### OODA ループに基づいたルーブリック評価

#### <自分×仕事について考える>

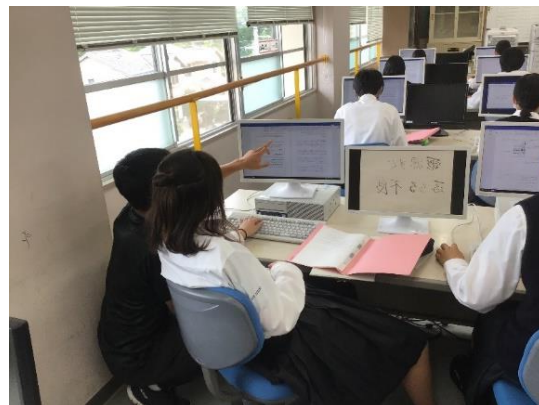
本単元は、「2030年の自分と社会について考える」というテーマで、「自分×仕事」という切り口から、「情報収集力」、「情報分析力」、「表現力」の基礎を養った。

授業方針としては、1年生ということもあり、「2030年の自分と社会について考えなさい。」といわれても、思考が深まらないことが想定されるので、思考のプロセスを提示し、スモールステップでゴールに向かう、といった方法で授業を実施した。

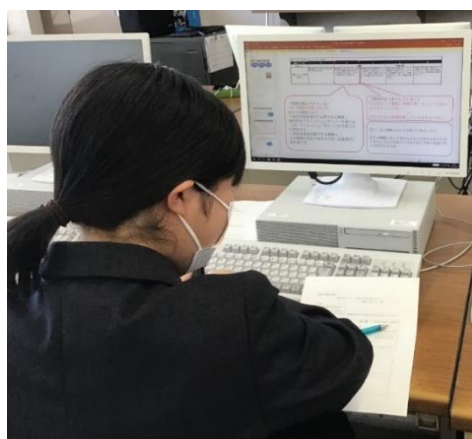
その際、ルーブリック評価を見ながら、自身の評価を行わせ、余裕がある場合は、なぜその評価であるのかを言語化させた。また、情報収集分析で求められることは、ワークシートでは正確に認識できないため、面談を通して、情報収集の意義や分析の方法等を言語化させ、その内容で評価を行った。アウトプットに関しては、意義に触れ、聞き手の視点に立った資料づくり、意識改革を促すプレゼンを最重要観点として定め、生徒にも意識づけをさせた。



テーマ「2030年の自分と社会について考える」イメージ図



活動の様子



自己評価および面談による評価の様子

### <他者×仕事について考える>

本単元は「自身が働くということについて再度見つめ直す」というテーマで、「他者×仕事」という切り口から活動を行った。本単元は、「ケーススタディ」、「ディベート」、「論文作成」、「講話」、「ワールドカフェ」の5つの要素から構成されている。以下要素ごとに報告していく。

#### (ケーススタディ)

ケーススタディとは、ある具体的な事例について、それを詳しく調べ、分析・研究して、その背後にある原理や法則性などを究明し、一般的な法則・理論を発見しようとする方法である。今回は以下の方のケースによって学習を行った。

ケース提供者：(有) 土佐佐賀産直出荷組合 浜町 明恵 様  
 (株) サニーフーツ 出水 佐知 様

身に付けさせたい力として、「情報収集力」、「情報分析(編集)力」を掲げ活動を行った。授業の流れは以下のとおりである。

ケース読み込み→構造化→問いを立てる→インタビュー→振り返り

ケーススタディに関しては、教員対象の勉強会を設け、実際に各先生に作成してもらい、それに関して生徒にプレゼンをしてもらった。「構造化は 100 人いたら 100 通りある」ということを伝え、自分の枠組みと視点で行わせた。



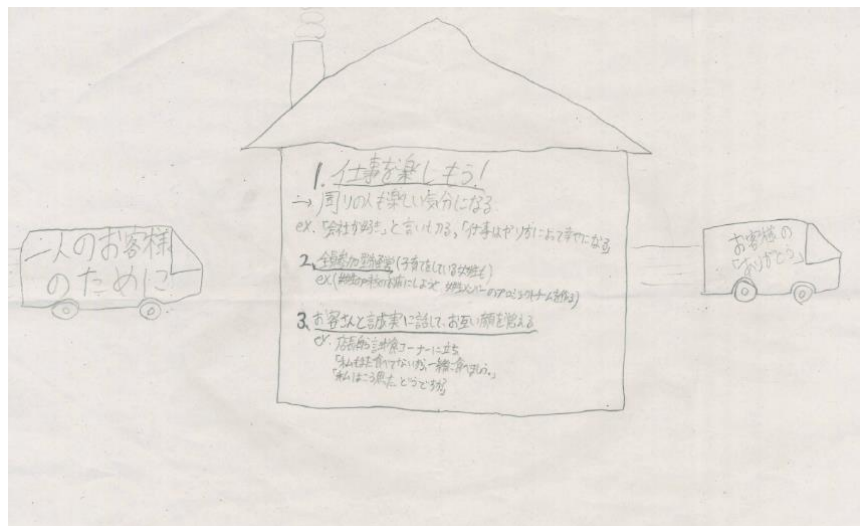
教員による構造化プレゼンの様子

インタビューに関しては、インタビューとネットからの情報収集の違いに触れ、また、相手からの確かな答えを引き出す問い・深い問いを立てさせるべく、何度も突き返しを行い、深みをもたせるための指導を行った。

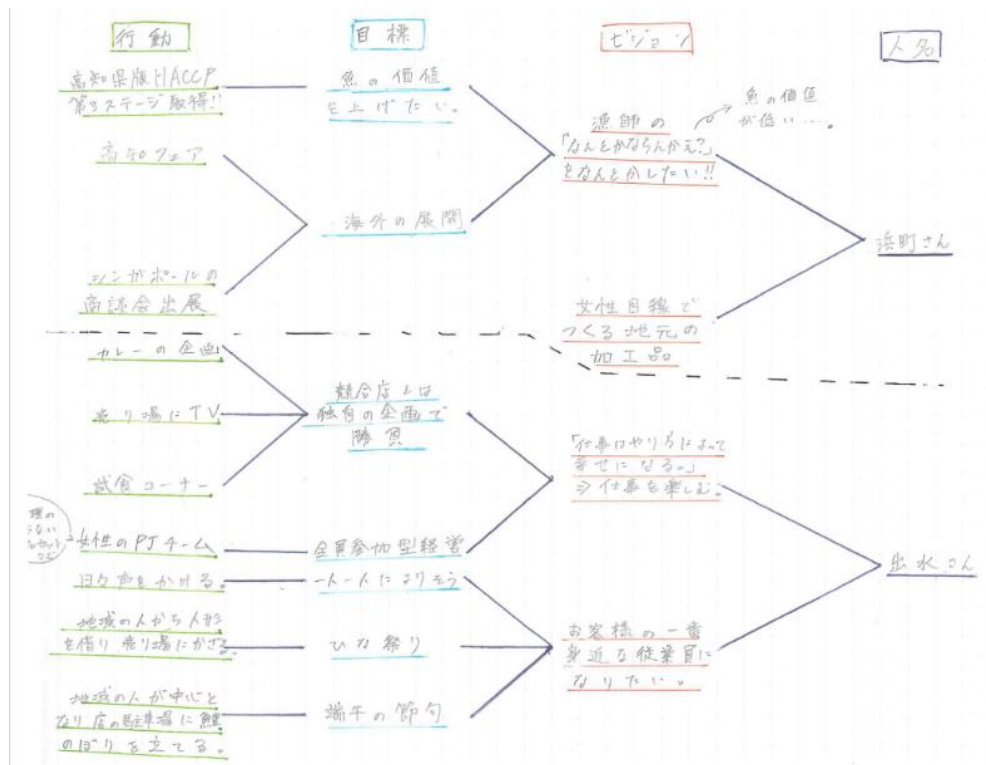


インタビューの様子

構造化では、今までは枠が与えられ、そこに正解を書き込むことで図表を仕上げるといった経験ばかりであったため、生徒からは、「これでありますか?」といった声が多数上がり、序盤は苦戦していた。しかし、終わってみると全員がオリジナリティある構造化ができていた。

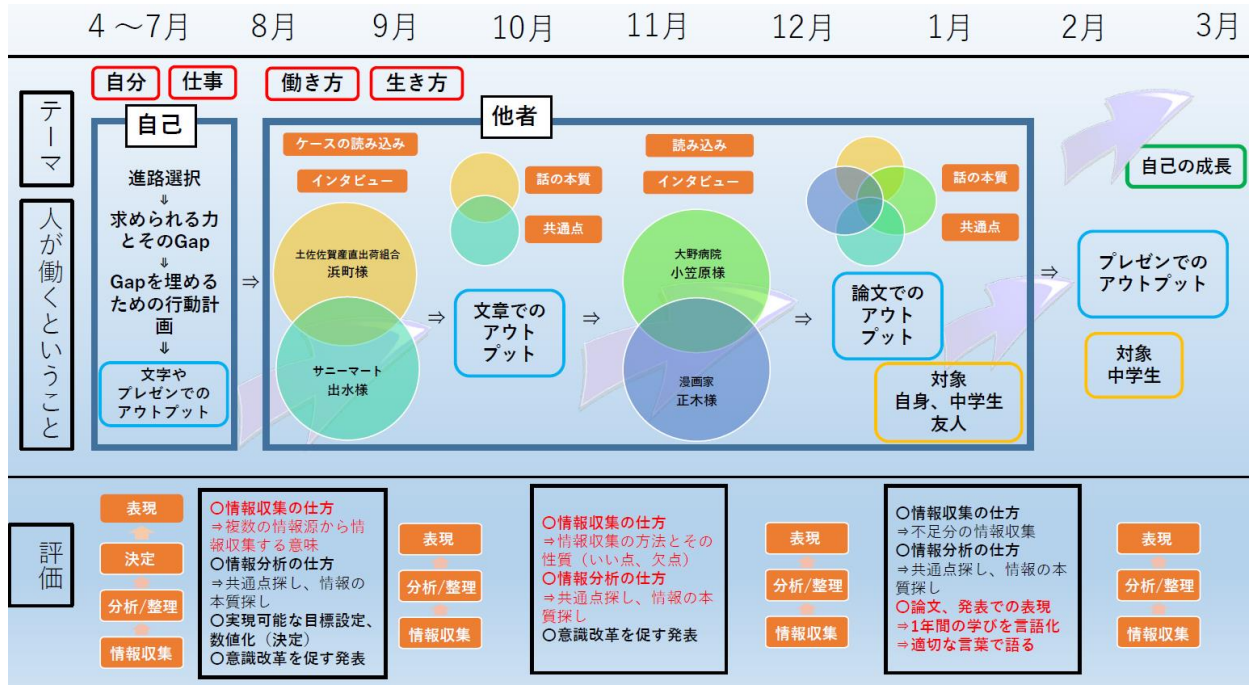


生徒の構造化作品



生徒の構造化作品

ケーススタディが終わった時点で振り返りと方向性の改善を行った。今年度1年生の年間計画は、対象生徒の実態が分からない状態で作成したこともあり、半期を終えた段階で、学年団の先生方の意向や、カリキュラム開発等専門家の川村 氏の助言をもとに、計画の修正を行い、当初の計画とは異なる形で、後期のプログラムに挑んだ。変更した背景としては、教員側の当初イメージしていた生徒像と異なる部分が多くあったためである。また、様式も担当のデザインしやすい形に作り替え、カリキュラムの再構築を行った。以下に再構築後の年間計画を示す。



再構築後の年間計画